国際学生会議

International Student Conference

目次

第 1 章　国際学生会議概要 2
実行委員長挨拶 3
開催目的 4
国際学生会議の沿革 5
第 2 章　第 58 回国際学生会議概要 6
第 58 回国際学生会議（ISC58）概要 7
総合テーマ 9
プログラム全体の流れ 10
会議日程 102
参加者名簿 13
スタッフ名簿 15
主催団体報告会について 17
メディアについて 18
第 3 章　研修旅行 19
事前研修旅行総括 20
各支部研修旅行総括 21
第 4 章　本会議 32
分科会総括 33
各分科会報告 34
総務総括 71
各プログラム報告 72
第 5 章　参加者の感想 76
ISC58 の感想 77

第１章

国際学生会議概要

実行委員長挨拶

開催目的

国際学生会議の沿革

実行委員長挨拶

拝啓時下益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

この度、2012 年 8 月 22 日から 9 月 2 日の 12 日間にかけて、第 58 回国際学生会議を開催いたしました。開催に当たりましては多くの財団様、企業さま、そして個人の方からも多大なるご協力をいただき、大変感謝しております。多くの方にご指導ご鞭撻いただき、本会議を開催することができました。

本年度は世界から 52 名の学生が参加、4 日間の研修旅行と 8 日間の本会議の両プログラムを行いました。本会議では 5 つのテーマに分かれ、ディスカッションおよび発表を行い、現在の社会が抱える問題について熱く議論を交わしました。またディスカッション以外にも 1 週間を超える期間寝食を共にすることで国際学生会議が掲げる大きな目標の柱である他文化との相互理解を達成できたものと考えております。

この、学生たちがそれぞれの思いをかけ懸命に作り上げた 12 日間が 2012 年の夏のみにとどまらず、将来の世界を作っていくものとして発展していくことを信じ、願っています。

敬具

2012 年 9 月吉日
第 58 回国際学生会議実行委員長
岩佐数音

開催目的

新しい時代を築いていくのは、我々若者の役目である。ますます混迷の度合を深める国際情勢の中、若者の可能性こそが未来の希望への萌芽であり、我々はそれを自分自身で育んでゆかねばならない。国際学生会議（略称：ISC）は、そのような自覚の上に、我々が学生として出来ることは何か、との思いを集結し、具体化したものである。1954 年の第 1 回の開催以来現在に至るまで、たゆむことなく毎年開催されてきた本会議の活動は、学生による国際交流の先駆的役割を果たすと共に、数多くの優秀な人材を育ててきたものと自負するものである。ISC で見聞きしたこと、体感したことは、参加者各人の血肉となり、そこで培う友情は、我々の勇気を奮い起こす力の源となる。ISC の開催が世界をすぐに変革するわけではない。しかし、変わるものがある。それは、参加者一人一人の内面の世界である。そして、一人一人が変わるならば、世界を変革することも可能なのである。

ISC の目的は、参加者一人一人が、他者との対話・交流を通して人の多様性を認識することである。それは、世界の抱える諸問題を自分自身の問題として捉え、問題意識を各国の若者と共有し、問題解決に向けて学生として行える可能性を共に追求することを可能にする。我々は、この地道な活動の結晶を社会に提言することで、世界平和に貢献出来れば幸いであると考える。

国際学生会議の沿革

国際学生会議の母体は、1934年に始められた日米学生会議にあります。日米開戦前夜両国の関係の悪化を憂える学生有志が奔走し、「世界の平和は太平洋の平和、太平洋の平和は日米間にあり、然してこの現実には若き日米学生の間においての率直な意見の交換、及び、相互理解の信頼を促進しなければならない」という提唱文の下に、第1回日米学生会議を青山学院大学において行いました。会議は1940年まで続けられましたが、1941年の日米開戦により中断の憂き目を見ることとなります。

戦後、日本の新しい胎動の中で、1947年に戦争の反省を踏まえ、「各国の親善と正しい理解こそが国際平和達成への唯一の道である」という認識の下、第8回日米学生会議が日本で開催されました。その後、1954年にアメリカで行われた第15回会議を最後に日米学生会議は解消され、国際学生会議へとその流れは継承されました。日米学生会議は、1964年にOBの手により再結成され現在も行われています。

第1回国際学生会議は、1954年に12カ国から84名の外国人の参加を得て、28日間にわたり東京、関西、北海道、仙台で行われました。以後国際学生会議は、国際政治、経済、社会、文化などの多方面からの活発な討論と研修旅行を行って発展していくのですが、その時々の世界情勢とともに多くの屈折を経ています。1962年の第9回国際学生会議では、従来の本会議、研修旅行に加えて、団体代表者会議が新しく設けられ、会議をより有効なものにするために、決議をもって団体間の具体的協力活動を提起しました。それによって、以後の会議の充実と参加団体間のより強い結束を目指したのです。

1968 年には、学生運動のなか日本国際学生協会の中央委員会が分裂し、翌年の国際学生会議は行われませんでしたが、1970 年には会議が再開されました。第 32 回におきましては、日本人参加者選抜制度を廃止し、国際学生協会員への国際交流の場を広げました。また、第 37 回では、帯広市とのタイアップにより、市民の方と国際交流の体験を共にしました。そして第 43 回には参加国が計 16 カ国に上がる成果をあげることができました。第 45 回においては、多岐にわたる分野から専門家をお呼びして、議論する機会を設けることで社会との関連をさらに深めました。現在では日本人・外国人ともに選考を行い、会議の質を高めることに注力しています。以上のような経緯を経て 2012 年、第 58 回国際学生会議を東京にて開催いたしました。

第 2 章

第 58 回国際学生会議概要

第 58 回国際学生会議概要

総合テーマ

第 58 回国際学生会議日程

プログラム全体の流れ

参加者名簿

スタッフ名簿

助成　協賛　後援

主催団体報告会について

メディア掲載

第 58 回国際学生会議(ISC58)概要

会期・場所　研修旅行旅行(ST=study tour)　8 月 22 日～25 日
（京都、大阪、神戸、岡山、九州の各地で開催）
本会議　8 月 26 日～9 月 2 日
国立オリンピック記念青少年総合センター

総合テーマ　「未来を据えて、この世界・この社会で今考えること。」

分科会テーマ

1. 若者の雇用機会～景気に左右されない雇用を目指して～
2. 有限資源の実用的活用について～30 年先を見据えて～
3. 貧困の解決を目指して～新たな支援の形を模索する～
4. 移民の社会統合～多文化主義の再考～
5. 情報社会におけるメディアと人々の関わり方
   ～より豊かな情報化社会を目指して～

ね ら い　様々な価値観、考えを認めあうことで真の相互理解を達成する。
各国を代表する学生が ISC のプログラムを通して学び、成長する。
開催国である日本の素晴らしさを体験し、世界へ発信する。

公 用 語　英語

参 加 者　日本人学生　38 名（内、実行委員 15 名）
外国人学生　14 名

参 加 費　日本人学生　5 万 5 千円
外国人学生　3 万 5 千円

内　　容　分科会における問題提起、議論
サマリー発表
日本文化体験

各国文化紹介
各種交流会

ISC58 参加大学
東京大学、慶応大学、早稲田大学、東京工業大学、国際基督教大学、東京外国語大学、筑波大学、明治大学、立教大学、津田塾大学、同志社大学、同志社女子大学、甲南大学、関西学院大学、関西大学、神戸大学、神戸女学院大学

計 17 大学

ISC58 参加国・地域
フィンランド、ドイツ、イスラエル、日本、フィリピン、韓国、トルコ

主　　催　　日本国際学生協会
（I.S.A.： The International Student Association of Japan）

助　　成　　国際教育振興会賛助会
双日国際交流財団
平和中島財団

協　　賛　　大江整形外科
下川眼科
株式会社ゼンリン
西田 忠康氏
原田歯科医院
南が丘病院

後　　援　　外務省
GLOBAL COMMONS 株式会社
財団法人京都府国際センター
経済人コー円卓会議日本委員会
国際教育振興会
サイコム・ブレインズ株式会社

総合テーマ

「未来を据えて、この世界・この社会で今考えること。」

近年グローバル化が進む中で、国家間の距離は確実に縮まり、国境を越えて移動する人々の数は増え続けている。それに伴ってそこで生活をする人々の数も年々増え続けている。当然のことながら、違う国や地域で生まれ育った人々は違う価値観や考えをもつ。それらの人々が対立を起こさず共生していくには、「真の相互理解」を達成する必要がある。「真の相互理解」とはお互いの考えや価値観を伝え合い、理解するだけではなく、理解したうえで認め合うことである。そこで普段は関わりのない国や地域で育った学生同士がこの国際学生会議で出会い、研修旅行や本会議を通して、お互いを認め合うことで「真の相互理解」を達成することがこの会議の一番の目的である。

また我々学生が国際学生会議を通じて、学び、成長することで将来より良い社会を築けることを強く願う。分科会で世界に存在する様々な問題について議論する中で、各国間でその問題に対する捉え方に違いがあることを理解し、その違いを認め合う。その上で自身の考えも認めてもらえるように論理的に考え、発言する力を身につける。これらを身をもって学ぶには国際学生会議のような多国間交流が最適であり、このような学びを通して参加者が成長できることを確信している。また国境を越えたヒト・モノ・カネの移動が盛んになってきた近年、今まで以上に国際的な交流の重要度は増している。しかしここ数年日本人学生は「内向き志向」が強く、外国離れが進んでいると言われている。そのような学生にとってこの国際学生会議が国際交流の第一歩となれば、この上ない喜びである。

今回の総合テーマでは過去、そして今までに培われた世界の社会システムや文化を踏まえながら現状を捉えて分析し、未来へのスパンを考慮に入れての会議にしていきたい、という思いを込めている。

この第 58 回国際学生会議を通して、参加者に日本の現状を理解してもらい、日本と海外の一つの架け橋になりたいと心から強く思う。

プログラム全体の流れ

2011 年
11 月　　第 58 回国際学生会議運営委員会発足

2012 年
4 月・5 月　説明会

参加者募集のため、関東・関西両地域で大学施設や公的施設を使用して、説明会を実施しました。ネットでの広報に加え、実行委員と参加者が顔を合わせる説明会を行ったことで説明会参加者に国際学生会議の雰囲気を伝えることができました。

5 月末　　選考

参加者の選考をアプリケーションシート、次段階として面接で行いました。アプリケーションシートでは希望のテーブルテーマを選んだ理由やその時点での考えを問い、面接では実際に話すことで伝わってくるモチベーションやコミュニケーション能力、強みや弱みといった、テーブルでディスカッションをするにあたって重要になってくる要素を確認しました。また、面接の中で英語力についてもチェックを行うことで会議自体の英語のレベルを保つことにも注力しました。

6 月 10 日　プレ ISC

日本人参加者で顔合わせを行い、各テーブルではディスカッションを行いました。目的としては全体での交流をはかり、本会議をスムーズに進めるためのリレーション構築を行うこと、及び本会議でのディスカッションに備えての英語力の把握と興味範囲の確認、そしてディスカッションに慣れることであり、それらを達成することができました。

7 月・8 月　各テーブルでの事前勉強会

テーブルにとって回数は異なりますが、それぞれ 1 回ないし 2 回、日本人参加者で事前勉強会を実施しました。どのテーブルも事前課題を出すことで効率的に勉強会を進め、議論のための知識を定着させることができました。日本人が不得意とする英語での専門用語の確認や、プレ ISC に引き続き行われた英語でのディスカッションの練習も本会議でのディスカッションをスムーズにしました。また、事前に行なっていること

から、比較的時間の余裕があり、フィールドワークを行ったテーブルもありました。あくまで日本で実施するものであり外国人は参加できませんが、同様に課題を出してネット上で共有する、また、日本での事前勉強会の結果を本会議までに共有し意見を出し合うといったことをオンラインで行うことで、意識面・知識面で乖離が起きないよう配慮しました。

8 月 22 日～同月 25 日　事前研修旅行(次頁日程及び ST 部長総括参照)

8 月 26 日～9 月 2 日　　本会議(次頁以降に詳細を記載)
※9 月 1 日　　成果発表会サマリー発表

10 月 13、14 日　　主催団体報告会

第 58 回国際学生会議会議日程

<table>
<tr><th>日程</th><th colspan="2">プログラム</th></tr>
<tr><td>8 月 22 日（水）
8 月 23 日（木）
8 月 24 日（金）
8 月 25 日（土）</td><td colspan="2">事前研修旅行
（京都・大阪・神戸・岡山・九州）</td></tr>
<tr><td colspan="3">本会議</td></tr>
<tr><td>8 月 26 日（日）</td><td>開会式　基調講演
分科会Ⅰ
ウェルカムパーティー</td><td rowspan="7">国立オリンピック記念青少年総合センター</td></tr>
<tr><td>8 月 27 日（月）</td><td>分科会Ⅱ　分科会Ⅲ
各国文化紹介</td></tr>
<tr><td>8 月 28 日（火）</td><td>分科会Ⅳ・分科会Ⅴ</td></tr>
<tr><td>8 月 29 日（水）</td><td>研修旅行</td></tr>
<tr><td>8 月 30 日（木）</td><td>分科会Ⅵ　分科会Ⅶ
日本文化体験</td></tr>
<tr><td>8 月 31 日（金）</td><td>分科会Ⅷ　分科会Ⅸ</td></tr>
<tr><td>9 月 1 日（土）</td><td>サマリー発表　閉会式
フェアウェルパーティー</td></tr>
<tr><td>9 月 2 日（日）</td><td>解散</td><td></td></tr>
</table>

参加者名簿

Table 1 若者の雇用機会		
小山啓介	関西学院大学	Japanese
中村奈菜美	東京大学	Japanese
Ben Martin Malayang	University of St. La Salle	Filipino
Kang Kyung Woo	Gyeongnam National University of Science	Korean
Mary Flo Beton	University of St. La Salle	Filipino

Table 2 有限資源の実用的活用について		
上田瞭	関西学院大学	Japanese
保坂泰貴	東京大学	Japanese
南方翔守	東京大学	Japanese
森谷宥紀	国際基督教大学	Japanese
山永航太	立教大学	Japanese
Jaypril Ann Octava	University of St. La Salle	Filipino
Joywen Marcelo	University of St. La Salle	Filipino
Kenny Ronkainen	Aalto University of Economics	Finnish
Lee Hyunhee	Seoul National University	Korea

Table 3 貧困の解決を目指して		
秋庭愛子	東京大学	Japanese
神原沙耶	津田塾大学	Japanese
高倉美幸	関西学院大学	Japanese
橋村裕介	国際基督教大学	Japanese
矢野真衣	関西学院大学	Japanese
Fritzchel Rellos	University of St. La Salle	Filipino
Hazel Ann Amene	University of St. La Salle	Filipino

Table 4 移民の社会統合		
小山真奈	慶応義塾大学	Japanese
斉藤美緒	立教大学	Japanese
澤本篤志	立教大学	Japanese
津村真衣	神戸女学院大学	Japanese
山瀬加奈	明治大学	Japanese
Erez Akri	Holon institute of technology	Israeli
Nayoon Kim	Seoul National University of Science and Technology	Korean

Table 5 情報社会におけるメディアと人々の関わり方		
池田真奈美	神戸大学	Japanese
川田さくら	東京大学	Japanese
田口梓	筑波大学	Japanese
平間美冴	東京外国語大学	Japanese
Alper Ergin	Isik University	Turkish
Eduardo Jr. Tan	University of St. La Salle	Filipino
Joel Jung	University of Hohenheim	German

スタッフ名簿

第 58 回国際学生会議実行委員会			
実行委員長		岩佐　数音	東京大学 3 年
総務	部長	末岡　美緒	神戸女学院大学 3 年
	スタッフ	川崎　康博	関西学院大学 3 年
財務	部長	岩瀬　史帆	神戸女学院大学 3 年
	スタッフ	和田　将彦	関西学院大学 2 年
フォラム	部長	佐藤　多恵	早稲田大学 3 年
	フォラム	西堀　祐大朗	立教大学 3 年
	フォラム	香田　華奈	東京大学 3 年
	フォラム	松尾　あつみ	同志社大学 3 年
	フォラム	大谷　茉莉花	東京工業大学 3 年
国際渉外	部長	梶山　有希子	甲南大学 3 年
	スタッフ	藤田　ちづる	甲南大学 2 年
広報	部長	諸角　早紀	同志社女子大学 3 年
	スタッフ	伊藤　優衣	神戸女学院大学 2 年
ST	部長	尾崎　仁美	関西学院大学 2 年
撮影係		大川　裕生	関西学院大学 1 年

各支部研修旅行実行委員長		
京都支部	畑　杏奈	同志社大学 2 年
大阪支部	三宅　優子	関西大学 2 年
神戸支部	小幡　岬	甲南大学 2 年
岡山支部	上雲地　玲奈	ノートルダム清心女子大学 2 年
九州支部	石井　亜理沙	北九州市立大学 2 年

日本国際学生協会　中央役員		
会長	郡山　めぐみ	関西学院大学 3 年
中央事務局長	鳥山　昂史	神戸大学 2 年
財務部長	儀間　真和	北九州市立大学 3 年
広報部長	佐武　里砂	同志社女子大学 3 年
国際渉外部長	佐久間　静香	北九州市立大学 3 年
Ex 部長	山本　梨世	関西大学 4 年

各支部支部長		
東京支部	西堀　祐大朗	立教大学 3 年
※2012 年 9 月度から代理	大西　弘修	立教大学 3 年
京都支部	前田　美樹	同志社女子大学 3 年
大阪支部	山本　彩代	関西大学 2 年
神戸支部	山内　菜摘	関西学院大学 3 年
岡山支部	山本　麻衣	ノートルダム清心女子大学 3 年
九州支部	池田　早希	北九州市立大学 2 年

主催団体報告会について

2012 年 10 月 13 日に国際学生会議主催団体である日本国際学生協会の全国合宿において、第 58 回国際学生会議報告会を行いました。国際学生会議の概要および実際の様子を、写真を含んだプレゼンテーションおよび、映像で報告いたしました。58 回の概要を雰囲気と共に語ることで、多くの会員が国際学生会議について、その魅力を理解し、興味を持ったことと考えます。報告会後には、今回第 58 回国際学生会議についてどのような議論が行われてきたかという質問が出たり、次回に参加者としてないし運営側としてコミットしたいという意見が出たりなど、次回第 59 回の国際学生会議にもつながる報告会となりました。

メディアについて

2012 年 2 月に実行委員長の岩佐が東京 MX で放映されている『ゴールデンアワー』に出演、国際学生会議について広報を行いました。本プログラムの要旨を話した他、写真も含め、本会議の雰囲気を伝えるなどしました。番組は平日 21 時に放送され、twitter など SNS でも反響が見られました。番組内容としては様々な国出身の外国人と首都圏の大学生が社会問題について議論を行うというものであり、視聴者の層としても本会議に興味をもつ可能性の高い層に訴えられたことと考えます。

第 3 章

研修旅行

事前研修旅行総括

各支部研修旅行報告

事前研修旅行総括

ST 部長　尾崎仁美

１．　事前研修旅行概要

母団体である日本国際学生協会（以下 I.S.A.）のプログラムの一つである国際学生会議に参加する外国人参加者を I.S.A.の各支部（京都、大阪、神戸、岡山、九州）に派遣し、I.S.A.会員からの事前研修旅行参加者とともに観光や文化交流を行います。これは各支部の実行委員が企画し、ISC 本会議前に行うものです。 今年は 8 月 22 日～25 日に行いました。目的としましては、本会議前に外国人参加者が日本文化に慣れてもらうことと、日本人が彼らと交流できる機会を設けることです。

２．　事前研修旅行意義

事前研修旅行の意義で最も重量なことは、ISC 前に外国人参加者が日本の文化や慣習に触れ、慣れてから本会議に臨んでもらうことです。

また、事前研修旅行は企画者から参加者まで全員が『学生』です。つまり日本の『学生』の視点から日本を文化や慣習を見つめ、それを世界の『学生』に伝えることができる、それも Study Tour の醍醐味であると考えます。

３．　総括

今年の事前研修旅行のテーマは「『交流』があなたの将来につながる『挑戦に』」です。ここで『交流』とは、事前研修旅行で体験することができる国際交流、他支部の I.S.A.会員との交流、先輩後輩との交流などを指します。私は、誰かと出会い、その人と交流することで様々なきっかけや刺激を得ることができ、さらに自分自身の成長にもつながると考えています。ですので、この事前研修旅行で様々な『交流』に挑戦し、きっかけや刺激得て、参加者のその後の生活、人生につなげてほしいという願いを込めこのテーマを設定しました。

年々I.S.A.会員は増えており、同時に事前研修旅行への参加者も増え、今年は約 300 人もの方々が参加してくださいました。さらに今までは自分が所属している支部に参加しがちだったのが、広報の仕方を変えることで多くの方々が他支部に参加してくださいました。様々な広報手段を駆使した結果が出たのではと思っております。

最後になりましたが、素晴らしい事前研修旅行を企画してくれた各支部実行委員長をはじめとする実行委員のみなさん、そしてこの事前研修旅行を行う上で御協力してくださった方々、何より参加してくださった方々にこの場を借りて心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

各支部研修旅行報告

京都支部　総括

実行委員長　畑杏奈

京都支部の ST スローガンは、『自分を伝える、自分を変える』でした。これは、私が ST 実行委員長としてどのような ST を作り上げたいかを構想したときに、参加者にとって、そしてコミの一人一人にとって成長の場にしたいという思いが中心にあったからです。参加者には外国人参加者と交流できる機会を例年以上にもたせるよう、企画段階から、どのような交流の仕方がより親密な国際交流の実現につながるかを第一に実行委員の人たちに考えてもらいました。私が参加者に達成して欲しかった“成長”は、英語を用いて自分の考えを伝えるということに挑戦し、その対話を通して新しい価値観を得るというものです。参加者のうちどのくらいの人が ST でこのような経験をすることができたかはわかりませんが、一人でも多くの人にとって刺激になる 4 日間であったことを願います。

ST の魅力は、単なる日本人だけの観光ではなく、その中に外国人留学生がいることにあります。同じ学生同士でも、国という育った環境が異なれば、価値観や文化、常識にもそれぞれの特徴が出てきます。しかし、それと同時に、国籍が異なれど、人間として共通にもっているモノにも気づきます。それは友情の心であり、相手を理解しようとする思い、感謝の気持ちでもあります。このグローバル社会では、国家間の違いも認めた上で互いの意見を尊重し、相互理解を目指す姿勢が求められています。これから社会に出ていく私たちは、言語や文化や価値観を異にする他者との違いに「気づく」だけでなく、その違いを「受け入れる」ことができたとき、本当の意味でひとりの人間として内面的に成長したと言えるのだと思います。そして、その成長が私たちの視野を広げ、国外にも目を向ける契機になります。そのような考えに立って、今年の京都 ST は、ミッションゲームやスポーツ大会など例年に無かった企画を取り入れることで、参加者一人一人に確実に外国人留学生との交流の機会を与えることを重視しました。国際交流の第一歩として、京都 ST が参加者にとって異文化という新たな視点を受け入れる経験の場になったのであれば幸いです。

そして私がもうひとつ目指していたのは、実行委員にとっての成長です。私自身、昨年初めて実行委員として ST に参加し、企画の大変さを知りましたが、自分の可能性も知るきっかけになりました。ST は実行委員として取り組む期間も長く、時に重圧に感じることもあったと思います。しかし、苦労の中でもコ

ミ同士で協力して企画を作り上げ、自分の意見を伝える大切さや、人をまとめ引っ張っていく立場を体感したことは、必ず成長につながったと思います。それは、彼ら自身が ST 後に積極的に新たな役職に挑戦する姿で示してくれました。ST が実行委員にとっても成長の場になったことは、彼らが ST と真剣に向き合ってきた証拠であり、ST を終えて多くの学びを次に生かしてくれていることが嬉しい限りです。

さらに、ST は私自身にも大きな変化をもたらしてくれました。それは、自分の殻を破ることです。オガチという責任ある役職を経験することで、人間関係と信頼関係の築き方、統率力、伝達力の難しさを痛感しましたが、その壁を乗り越えた先に、素直に人と向き合い、交流を深める楽しさを知ることができました。オガチとして、リーダーとはどうあるべきかを自分自身に問い続けたこの半年間は、私を人間的に成長させてくれたと確信しています。ST は私の固定概念を変え、心を開かせてくれました。最後に得た達成感は忘れることのできない貴重な思い出であり、ST 実行委員長を経験したことは今後も私の自信になるでしょう。

最後になりますが、ST 期間を通し、私の足りない部分を指摘してくれ、私の考えに理解を示し、最後まで協力しついてきてくれた ST 実行委員のみんなに心から感謝します。そして、私を支えてくださった多くの方々と、京都 ST を無事成功へと導いてくれ、「楽しかった」という温かい言葉を届けてくださった全国の参加者の方々にお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

京都 ST 参加者の声

早川友美

私は、ST には 3、4 日目に参加しました。私は 3 日目の下賀茂神社でのミッションゲームが特に印象に残っています。私のチームは外国人の方、他支部の方が一緒で、他のチームに比べても特に交流を図る機会が多く、ST の醍醐味がとてもよく味わえるチームでした。京都支部は他支部よりも伝統的な建造物が多く存在する場所で活動しているので外国人の方にはミッションゲームなどを通してもっと日本の文化を知ってもらいたい、と思いました。そのためには、参加者である私自身がもっと京都を知り、せめてミッションゲームの開催地のことぐらいはちゃんと学んでいけばよかった、と後に思いました。そして、京都にはせっかく新撰組など、池田屋があるのに、そういうものを知らないが、歴史を学びたい外国人もいると思うので歴史上でどのようなことが起こったのかを ST 内でもっと学べたらいいとも思いました。また、下賀茂神社には初めて行

ったのですが京都には本当に古くからの建物が今も地震などで倒れることなく残っているのだと改めて実感しました。次回はより、コミュニケーションを図れるように、また、自信をもって京都のことを説明できるようになりたいと思いました。

柳沢貴

今回僕は1日目･4日目に京都STに参加しました。僕がSTに参加した理由は、気軽に参加でき参加費も安く、外国の人と一緒に観光でき英語を話す機会を求めていたからです。

ST 全体の感想として、ASM(※1)で仲良くなった神戸支部の友達と再会し、新しい人たちとも仲良くなれました。それは、実行委員の人たちが何か月も準備して作り上げた内容のおかげだと思います。本当に楽しむことができました。※2)外デリさんとも最終日僕の家に荷物を預けて、スポーツ大会の後、家にシャワーを浴びに来ました。そこで一緒にかき氷を食べ、ゲームを楽しんだことは本当に最高の思い出です。しかし、ST で自分の英語力の低さを痛感しました。もっと自分が喋れたらもっと楽しめたのかなと感じました。来年留学へ行き、英語が流暢になって日本に帰ってきたらST実行委員として素晴らしい企画を作り上げたいと思います。

ST とは支部内の団結力を高め、他支部の人とも仲良くなり、外国人参加者と一生の思い出を作り上げるプログラムだと思いました。自分としてももっと英語力を高めようと思えた良いきっかけとなりました。

(※1)　発行著注；ASM＝日本国際学生協会の全国合宿のこと。
(※2)　発行著注；外デリ＝外国人 deligate。外国人参加者を指す。

【日程】

8月22日　日本文化紹介、ウェルカムパーティー
8月23日　二条城、友禅染体験、清水寺観光
8月24日　下鴨神社、八ツ橋づくり体験、四条散策
8月25日　スポーツ大会、フェアウェルパーティー

大阪支部　総括

実行委員長　三宅優子

今年度の大阪 ST にはフィリピンから二名、トルコから 1 名の計 3 名参加してくれました。例年よりも 1 人多かったのですが、日本人参加者も例年より増えていたのでバランスがよかったと思います。外国人参加者は皆とても礼儀正しく気遣い屋で、どこか日本人に似たところがあってか、すぐに日本人参加者と打ち解けた様子で、各日の活動・企画はもちろんですが、単純に日本人参加者と過ごす時間を楽しんでいるようでこちらもとてもうれしく感じました。

今回の大阪 ST では、「おかえりなさい、大阪へ。」をテーマにしました。大阪 ST に参加して、大阪にもう一度来たいと思える、または支部会活動に積極的に参加するきっかけとなる企画・雰囲気づくりをすることと、様々な面から大阪を知ってほしいという思いが込められています。今回の大阪 ST は今までとは異なるものにしたいという目標がありました。一つは大阪 ST の運営に関してで、これまで参加者が少人数のためアットホームな雰囲気で外国人参加者との交流がしやすいというのが長所でしたが、そういった身内の雰囲気からプログラムとしての意識が薄れ、企画の準備不足等の短所が見られました。今回はそういった部分をなくそうと努め、まだ改善の余地はあるものの計画的に準備を進めることができました。二つ目は企画内容に関してで、年々内容がマンネリ化しているように感じ、旅行情報誌に載っている「大阪観光」では体験できないことを企画したいと考えました。期待通り実行委員は、どの日も参加したいと思える楽しい企画を考えてくれ、その新しい挑戦は戸惑うこともあり、真似をすることができず力のいることだったと思いますが、新しくとても面白い ST になったのではないかと自負しています。

来年に向けての課題としては、実行委員の人数をもっと増やして、実行委員自身も ST を楽しむことです。特にデイチーフの負担が大きかったため、その他の実行委員が仕事を把握できなかったことで起きたトラブルもありました。
しかし、多くの参加者から「楽しかった」という言葉が聞けたことで実行委員一同、やりがいを感じました。また、外国人参加者も大阪と大阪支部を気に入ってくれ、深い絆ができたと感じました。

実行委員をはじめホスト、ST に参加してくれた大阪支部の皆のおかげで今回の大阪 ST を行うことができました。未熟な私でしたが、実行委員長という仕事を通して自分自身も成長できたと感じています。2012 年大阪 ST に関わってくださったすべての方々に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

大阪 ST 参加者の声

森井圭一郎

僕はもともと国際交流に興味を持っていたこともあり I.S.A.に入ったのですが、今回の ST は、前期に※3)プログラム等に参加していなかった僕にとっては最初の、英語とのふれあいの機会となりました。バリバリ英語を使っていくのかなと少し緊張していたのとは裏腹に、大阪支部はアットホームな雰囲気で進んでいきました。またトルコ人のアルパーのホストも務めましたが、大阪支部の友人も家に招いて毎晩お互いの国について話し合い、話題は尽きず四日間はほとんど眠らず過ごしたほどです。

外国人参加者とはもちろん、知らない人たちとの交流にあふれており、観光も楽しむことができ、ST を通して本当に世界観が変わった気がしました。まだまだ英語力はありませんが、今回外国人の友人ができたことを財産にし、また次の機会でも積極的に交流していきたいです。ありがとうございました。

※3) 発行著注；プログラム＝日本国際学生協会のプログラムのこと。

平木成美

ST に参加するのは今年で二回目でした。実行委員として ST の運営に関わり、去年と比較して自分が成長したと感じる場面が何度かありました。一番成長できた点は、外国人参加者と多く関われたことです。去年は緊張して積極的に話しかけることができず悔しい思いをしたので、今回はそれを課題として心がけました。外国人参加者との出会いはかけがえのないものです。

また来年に向けてさらに成長するには、英語力の向上が必要だと感じました。私は英語があまり得意ではなかったので、言いたいことを伝えにくいときは相手の外国人参加者が優しく聞きとってくれて意思疎通ができたという場面もありました。

しかし、ST を通して成長できたことを本当にうれしく思います。今後も毎年参加し、それぞれの年で様々な発見、出会いをし、成長したいです。

【日程】

8 月 22 日　ウェルカムパーティー、インスタントラーメン作り、箕面の滝
8 月 23 日　谷町、難波、商店街、四天王寺、道頓堀クルージング
8 月 24 日　万華鏡づくり、湯葉丼、二条城、西本願寺
8 月 25 日　緑地公園、バーベキュー、フェアウェルパーティー

神戸支部　総括

実行委員長　小幡岬

今年度の神戸 ST には、フィリピンから 1 人、韓国から 2 人の計 3 人の外国人の方が参加してくださいました。当初は 5 人の外国人参加者の予定でしたが病気や VISA の関係で参加できなくなってしまいました。外国人参加者の人数が減ってしまったのは国際交流を 1 つの目的としている ST にとっては残念なことでしたが、3 人がとても積極的に日本人参加者と交流し、企画を盛り上げてくれたのでとても濃い 4 日間になりました。

特に今年は尖閣諸島問題や竹島問題といった日本と中国・韓国との領土問題があり、外国人参加者とそのホストになった日本人で深く話をしたと聞きました。報道で聞く話しよりもこういった相手国の国民の話を直接聞くこと、共に考える機会ができたことをとても嬉しく思います。

今年度は全支部通して、他支部との交流を大切にしてきました。広報の段階から他支部への参加を促し、積極的に神戸支部以外の広報も行っていきました。その甲斐あって、神戸支部から他支部へ参加する方がたくさん出ました。特に 1 回生で他支部の ST に参加するのだと私に報告してくれた後輩の嬉しそうな顔を見たときはとても感動しました。

今年度の神戸 ST のスローガンは『繋がる絆、出会う ST』とし、17 人の実行委員と共に神戸 ST を作り上げてきました。外国人参加者とだけではなく、日本人参加者同士もこの ST を通して交流をし、これからに繋がることに貢献できたなら実行委員共々とても嬉しく思います。

私が実行委員の皆と会議を進めていくうえで一番大切にしていたことは、反論の無い意見を通さないという事です。会議で何の批判・意見が出なかった企画をそのまま本番に持って行くことほど恐いものはないと思ったからです。会議中、たくさんの意見・批判を実行委員の皆は出してくれました。楽しい事ばかりではない実行委員という役を 1 人 1 人一生懸命に頑張ってくれました。だから、今年の神戸 ST が成功できたのだと思います。

今年、私は ST 実行委員長をやらせていただいて本当にたくさんの人に感謝しています。

一緒に 2012 年度神戸 ST をつくりあげた最高の仲間である 17 人の実行委員、一緒に悩んでくれた ST 部長と他支部 ST 実行委員長、ST に参加してくれた外国人参加者と日本人参加者の皆さん、快く引き受けてくれたホストの皆さん、ST の実行委員ではないけれど ST を成功させるために協力してくれた皆さん、疲れていないかいつも心配してくれる友達や先輩や家族、そして私を 2012 年度神戸

ST 実行委員長に選んでくださった前年の実行委員長である小山啓介さん。このST を通して周りの人の大切さを改めて知り、感謝することができました。皆さんのおかげで神戸 ST を成功することができました。本当に本当にありがとうございました。

神戸 ST 参加者の声

福田紗貴子

私は 1、3、4 日神戸と 2 日目の京都 ST に参加しました。どの日も多くの人たちが参加していたので、今まで話したことのなかった神戸支部の人や他支部の人とたくさん話し合うことが出来、とても楽しかったです。また昨年はあまり自分から話しかけることが出来なかった外デリさんとも、私の拙すぎる英語ではありましたが、相手が一生懸命理解してくれたこともあり、交流してお互いのことも知れました。たくさんの出会いがあって、経験ありのプログラムだったのでとても貴重な時間となりました。これからの活動に活かしていきたいと思います。ありがとうございました。

【日程】

8 月 22 日	神戸	日本文化体験（縁日・うちわ作り・書道・お好み焼き作り）
8 月 23 日	奈良	文化遺産めぐり、奈良のまちを観光
8 月 24 日	神戸	英語で座談会、神戸の街を観光
8 月 25 日	大阪	4 グループに分かれて観光（たこ焼きづくり体験・食品サンプル作り体験・大阪城観光・住吉大社観光・商店街観光など)、フェアウェルパーティー

岡山支部総括

実行委員長　上雲地玲奈

今年の岡山 ST には、韓国とフィリピンから計 2 人の外国人学生が参加してくれました。当初の予想よりも外国人学生が少なく一方で日本人の参加者が非常に多いことから、ST が始まる前は、参加者同士が十分に交流することができるだろうか、外国人メンバーがたくさんの日本人の中で萎縮してしまわないだろうかなど、不安な気持ちでいっぱいでした。しかし、これらの不安は杞憂に終わり、ST 当日には参加者の一人ひとりがゲームや文化体験を通して初対面の人と仲良くなっていく様子や、外国人メンバーと自然に打ち解けていく様子を見ることができました。特に外国人メンバーの 2 人はいつも優しい笑顔で日本人の拙い英語を理解しようとしてくれ、そのおかげもあって英語の苦手な参加者も積極的に話しかけることができていたように思います。4 日間の活動としては、岡山の後楽園や児島の野崎邸、広島の厳島神社などの観光に始まり、うちわ作りや和菓子作りなどの体験型の企画も行いました。また、楽しむだけでなく、原爆ドームや平和記念資料館の見学の時間も設け、国際平和や原子力問題について考えを深めてもらいました。

今年の ST の総合テーマが“挑戦”であることを知ったとき、私は岡山 ST をよりよくするためにいろいろな挑戦をしてみたいと思いました。ST を岡山支部活性化の起爆剤にするために、準備段階でできる事を考え、1 年生に向けた ST の説明会や部費制度の導入、例年にない企画の発案、留学生に向けた ISC の広報など、様々な挑戦ができたと思います。その挑戦の全てが上手くいったとは言えませんが、参加者数の増員などある程度の成果は残せたのではないかと思います。来年度の課題として考えられるのは、実行委員のための勉強会です。今年は実行委員の知識不足で観光地の説明がほとんどできないままに終わってしまったので、初めて岡山を訪れる人のことをもっと考慮するべきだったと感じました。また、実行委員としての仕事に気をとられすぎて参加者とあまりコミュニケーションがとれず、その結果体調不良者に気づくことが出来なかったのも反省点のひとつです。

ST をふり返ってみると、実行委員長とは名ばかりで私自身至らない点ばかりでした。反省点は多々ありますが、なんとか無事に ST を終えることが出来たのは、“すべての参加者に満足してもらえるプログラムを作る”という目標のもと一丸となって頑張ってくれた実行委員や、実行委員の指示をしっかり聞きながらいつでも笑顔で企画を楽しんでくれた協力的な参加者の皆さんのおかげです。本当にありがとうございました。準備から当日まで悩むことや落ち込むことも

ありましたが、たくさんの人から「楽しかったよ、ありがとう！」と言ってもらえるSTになり、とても嬉しく思います。STは、かけがえのない友達や思い出、そして今後一歩踏み出す原動力を得ることができる素敵なプログラムです。来年も今年度の反省を活かし、さらに魅力的なSTを作り上げていってもらいたいと思います。

岡山ＳＴ参加者の声

織田安奈

私は今回のSTでフィリピン人のジェイプリルさんのホストを務めさせていただきました。初めは不安なことだらけで、先輩たちに心配をかけてしまいましたが、やはり自分と異なる文化圏の方と話すのは、とても楽しく勉強になりました。宗教について語ったりもして、他宗教を尊敬し合えば紛争は起こらないのではないかという彼女の考えに感銘を受けました。

また、岡山STに参加してくれた外国人参加はジェイプリルさんと、韓国人のウーさんでしたが、2人が原爆資料館で誰よりも真剣に資料を読んでいる姿を見たときは、日本人として嬉しい気持ちでいっぱいでした。同時に、私たちにも外国や異文化に対して理解しようとする姿勢が必要だと感じました。

ここまで少し堅い内容になってしまいましたが、STの4日間はとても楽しかったです。それまでは支部内の先輩や友達に対しても距離を感じていましたが、今回のSTを通して、これからもっと仲良くなれそうな感触をつかみました。また他支部の方々とも仲良くなることができました。

今回のSTは、私にとって初めてのプログラム参加でしたが、たくさんの刺激を受け、これからI.S.A.で積極的に活動していきたいと思えました。この次への原動力こそが、私がSTで得たものの中で最大の利益です。

【日程】

8月22日　ウェルカムパーティー、野崎邸見学、スイーツパーティー
8月23日　原爆ドーム、平和記念資料館、天然温泉ほの湯
8月24日　厳島神社、平清盛館、もみじまんじゅう作り体験
8月25日　文化体験、岡山城・後楽園観光、フェアウェルパーティー

九州支部総括

実行委員長　石井亜理沙

今年の九州 ST にはドイツ人、フィリピン人、イスラエル人の計 3 名の外国人学生が参加してくれました。九州支部の参加者は女性が多かった事もあり、外国人学生の男性のホスト先がなかなか決めることができず苦労しましたが、なんとか協力してくれる参加者の方がいましたので助かりました。外国人学生の皆さんは、私たちの拙い英語での誘導にも笑顔で答えてくれ、こちらもとても運営しやすかったです。私たちが考えに考えて企画した ST4 日間。どの企画のも真剣に、楽しそうに取り組んでいただけました。

九州 ST は 2 月から活動を開始しました。「異文化を通しての相互理～Beautiful days in 九州」をスローガンに掲げ、毎週一回は実行委員会を開きこのスローガン達成を目標に何度も会議を重ねました。実行委員の皆は意識が高くとても協力的でした。私が九州支部の ST 実行委員長という大役を失敗することなく成功に終えることができたのも、7 人の実行委員が私を支えてくれたお陰です。私を含めこの 8 人だったからこそ参加者皆さんに素敵な体験、経験のできる ST を提供することができたということを確信しています。多くの仕事も文句一つ言わず成し遂げ、最後まで私を信じついてきてくれた皆に感謝します。今年の九州支部は新しい取り組みとして、思い切って 2、3 日目を泊まりにすることを実行しました。ホスト以外の参加者の方にも外国人学生と一晩過ごし、より深い関係を築いてほしいという願いからお泊り ST を企画しました。一泊するということで例年より参加費が上がってしまうことで参加者が減ってしまうのではないかと懸念しましたが、それにもかかわらず多くの方が参加してくれました。また今年は九州支部からのみではなく他支部の方も参加していただけました。地理的に遠い場所にある九州支部の ST に遠路から参加していただけたことが素直に嬉しかったです。九州支部の ST がマンネリ化することが一番怖かったので、新しい企画をたくさん取り組みました。毎年行っていた下関、唐戸市場を思い切って無くしその代わりに手巻き寿司パーティーを実行したり、うどんを一から作ったり。新しい事への取り組みにたいして多くの不安もありました。無事成功できるのか、楽しんでもらえるのかと、ST が始まる数週間前からプレッシャーでした。その分無事に成し遂げられたときの達成感はすごいものでした。多くの参加者から、九州 ST に参加してよかった、という声を聞くことが出来ました。九州実行委員長として 2012 年度の ST に携わる事ができたことに感謝します。ST を通し私自身、大きく成長することができました。参加者

の方、外国人参加者の 3 人、九州 ST 実行委員、皆が何らかの形で成長を感じる事のできた 4 日間であったことを祈ります。
多くの方の協力のもと九州 ST を無事に終えることができました。この場をかりて感謝を述べたいと思います。

九州 ST 参加者の声

米倉佐紀

私は、4 日間九州 ST に参加し、フィリピン人参加者ジョイウェンのホストをしました。私自身、外国人を家に泊めるのは初めての経験であり、不安は多くありましたが、先輩方の話を聞き、やってみようと思いました。

ST の始まる前日、外国人参加者を緊張しながら迎えに行きました。ジョイウェンはフレンドリーな女の子だったので、すぐに打ち解けることが出来ました。

1 日目は手巻き寿司を食べ、文化紹介でした。この時にはジョイウェンとも仲良くなっており、私はジョイウェンを常に気にかけ、またジョイウェンも私によく話しかけてくれるようになっていました。

2、3 日目は大分に泊まりがけで行き、宇佐神宮を観光し、地獄巡りや、温泉、海を堪能しました。私も大分にはあまり行ったことがなかったので、初めて訪れた場所が多く、特に地獄温泉の色の綺麗さには驚きました。

4 日目はうどん作りをした後、フェアウェルパーティーでした。この 4 日間、外国人参加者に日本文化を紹介し、交流するだけでなく、自分自身も多くのことを体験し、意識も高まりました。ジョイウェンが私に伝えてくれたどれだけのことを理解できたかわかりませんが、とても楽しく充実した時間を過ごすことが出来ました。また、他支部の方と仲良くなることができ、九州支部の同回生や先輩方との距離も縮まった気がします。貴重な経験をさせて頂き、本当にありがとうございました。

【日程】

8 月 22 日　開会式、手巻き寿司パーティー、文化紹介、ラムネ一気飲み競争
8 月 23 日　宇佐神宮、大分地獄巡り、宿泊場所移動、カレー作り
8 月 24 日　昼食、田ノ浦海水浴場、温泉、
8 月 25 日　うどん作り、フェアウェルパーティー

第 4 章

本会議

分科会総括

各分科会報告

総務総括

各プログラム

分科会総括

テーブルチーフ部長　佐藤多恵

まず、本会議におきまして分科会を無事終了できましたことを、参加者並びに分科会検討やフィールドワークでご協力いただきました全ての方々に心から感謝申し上げます。

第 58 回国際学生会議は、「未来を据えて、この世界・この社会で今考えること 」という総合テーマのもとに、結成されました。現在、世界には多くの社会問題があります。その中で私たちが議題として掲げたのは、「若者の雇用機会～景気に左右されない雇用を目指して～」、「有限資源の実用機会について～30 年先を見据えて～」、「貧困の解決を目指して～新たな支援の形を模索する～」、「移民の社会統合～多文化社会の再考～」、「情報化社会におけるメディアと人々の関わり方～より豊かな情報化社会を目指して～」の 5 点です。グローバル化が進む中で、人々が共生していくために必要なことは「真の相互理解」です。同じ母国語、文化背景を持つ者同士ですら困難な議論を、異なる母国語、文化背景を持つ者で議論するのは難しいことです。しかし、そうした中でも、価値観を共有し、問題解決に取り組むなかで、私たちは「真の相互理解」を得、将来よりよい世界を築く第一歩を踏み出せたと確信しております。

私たちテーブルチーフには、参加者の皆さんを楽しませながら、時間内に議論の結論を導き出すという義務があります。いくら入念に準備を重ねても、予測のできない議論にとまどい、責任の重さを実感して苦しむこともありました。テーブルチーフという仕事は個人のテーブル内容に特化しているため、悩みを個人で抱えてしまいがちです。そのため、今回私達は本会議以前から、メーリングリストなどを駆使し、互いの現状を把握し、テーブルチーフ間の情報交換を密に行うようにしました。そうすることで、悩みは互いに助けあって解決していこうという共通認識を持てました。この共通認識があったからこそ、私たちは互いに支えあって、本会議を過ごすことができました。

今回、テーブルチーフとして各々、多くの貴重な知識、経験を得させていただきました。この知識、経験を今後のISCのさらなる向上や世界の平和に活かしていこうと思っています。

最後に、ご協力いただきました全ての方々に再度感謝の意を申し上げます。本当にありがとうございました。

各分科会報告

テーブルⅠ

若者の雇用機会

～景気に左右されない雇用を目指して～

テーブルチーフ　佐藤多恵

① 議題の背景

人間にとって仕事はただ、生活の経済的な支えになるだけではありません。かつて、イギリスの作家、ケン・フォレットは著書の中でこう述べていました。「人は誰でも、自分自身の誇りを自分に課された仕事を果たすことで確実にしていく。だから、職を奪うということはその人の自尊心を育む可能性さえも奪う。」と。

生活面、精神面の両側面で私たちにとって大切な雇用にもかかわらず、近年、アメリカをはじめ各国で、雇用悪化が原因のデモが多発しています。2011 年、国際ハイチ安定化ミッション（MINUSTAH）のフェルナンデス代表は、発展途上国、先進国の双方において若者の雇用が危機に直面している現状に警告を発しました。

世界的に既存の雇用形態が機能しなくなっている今だからこそ、雇用問題についてこれから社会に出ていこうとしている私たちが、今、真剣に考える必要があると考えます。

② 背景を受けて

今、世界各国で若者の雇用問題が大きな問題として取り上げられています。雇用は単に私たちを生活の面で支えているだけではありません。私たちには、生きがいとして雇用、つまり働く場が必要なのです。大切な雇用だからこそ、現在の、景気に左右されやすい雇用形態を改善すべきです。確かに、この問題は世界経済に左右されやすく、解決困難な問題です。しかし、解決困難だからといって専門家に任せておいてはならないでしょう。当事者である私たち自身が、現状を見極め、議論することが必要です。そして、具体的に何ができるか考えてみようと思いに至りました。

③　事前勉強内容

◆　プレISC

若者の雇用問題は現在、世界的に問題となっていることです。しかし、この問題は私たち若者にとって、あまりに身近な問題であるために、自国の若者の雇用問題しか考えない傾向にあります。そのため、参加者の皆さんの、若者の雇用に関する問題意識を日本一国から、世界問題へと変えることを、プレISCの目標にしました。

目標達成のために行ったことは、各自、担当国を割り振り、その国の若者の雇用問題、問題に対する各国政府の取り組み、その結果等を事前にパワーポイントでまとめてもらいました。本会議前の英語の練習もかねて、発表は英語で行いました。また、雇用問題は日常会話には使わないような難しい英単語が多いので、各自発表に使った難しいと思われる英単語をリストアップし、知識を共有しました。

さらに、議論の全体像を早めにつかんでもらえるように、現時点でテーブルチーフが考える議論の流れを共有しました。そして、参加者の皆さんの意見を取り入れて、テーブル全体での議論の目標が明確になりました。

残念ながら、プレISCには参加者全員が参加することは出来なかったのですが、発表内容や単語リスト、決定事項などを細かくオンライン上で公開し、知識の共有を行うことが出来ました。

こうした内容を通して、参加者全体で、若者の雇用問題を世界規模の問題として捉えることができ、テーブルとしての目標を明確にすることが出来ました。また、参加者全員、初めての集まりということで、アイスブレイキングの時間を多くとり、互いに打ち解けることができました。

◆　事前勉強会

事前勉強会は1回のみの開催でした。本会議では、国境を越えて若者の雇用問題の原因となっているものの解決策を提示しようと考えていたので、事前勉強会はその第一歩として、日本の若者の雇用問題の原因を明らかにしようと思いました。そのため、事前勉強会の目標は、日本の若者の雇用問題のモデルを作成し、具体的に何が原因となっているのか明確にすることとしました。

この目標を達成するために、事前勉強会までの課題として、各自、日本の若者の雇用問題として、調べてくることにしました。そして、勉強会にて調査内容を共有し、何が根本原因になっているのか議論を重ねました。最終的に、日本の雇用問題の原因として挙げられた原因は、外国人参加者にメールにて伝え、日本人、外国人参加者ともに知識を共有することが出来ました。

④　本会議内容

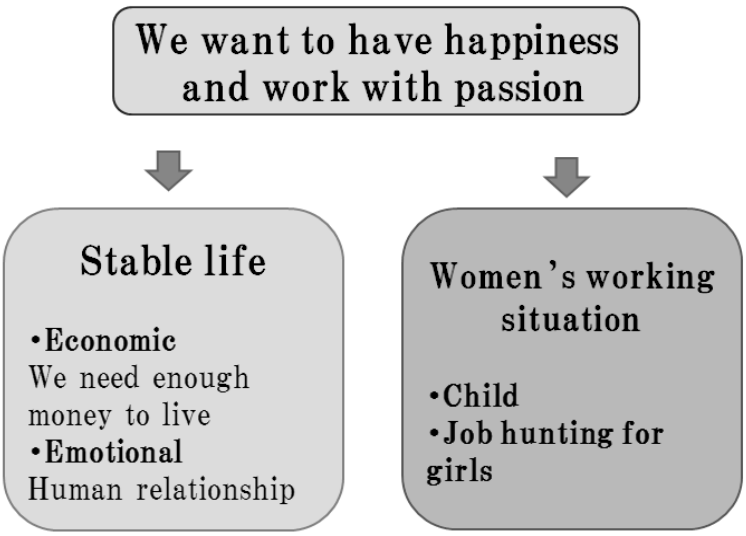
◆　分科会1　［アイスブレイキング］

日本人参加者はプレISC、事前勉強会で既に会っていますが、外国人参加者とは今回が初めて会う機会になりました。また、普段の分科会よりも時間が少ないため、議論の本質には入らず、参加者の親睦を深めることを目的としました。単なる自己紹介では、あまり話が展開しません。そこで、紙にそれぞれのアピールポイントを４つほど書いてもらい、それをもとに自己紹介をしてもらうことにしました。自分から紹介するというよりも、周りの人がその単語をもとに質問を投げかけて、自己紹介を進めていくという形です。そうすることで、自然とコミュニケーションが生まれ、話しやすい雰囲気ができました。

◆　分科会2　［全体の流れ紹介、議論の目標設定］

まず、自分たちの議論が最終的にどう提示されるのか、議論の時間はどの程度あるのかといったことは、参加者全員で共有したほうが、議論が進めやすいと考えました。そのため、議論の本質に入る前に、まず、上記のことを共有しました。この「共有」の過程を踏む事により、議論の中において常に全体の中でどこを話しているのか意識することができました。

次に、現状の雇用問題を解決して、どのような雇用を理想とするのか考えました。この理想は、議論全体の目標となってくる部分です。しかし、単にどのような雇用にしたいのか考えるのは困難であるため、自分の理想の将来の歩み方から考えていくことにしました。自分の将来について分析した結果を、国籍の違う者どうしで共有し、国境を超えて共通するものを見つけ出しました。その結果、自分たちは情熱をもって幸せに生きていくことが目標でそのために仕事は欠かせないと結論づけました。



◆　分科会3　［現状把握、問題の原因分析］

まず、参加各国の現状分析も兼ねて、それぞれの国の若者の雇用に関する問題とその原因を共有しました。この内容は、日本人参加者が事前勉強会で話し合ったことであり、この場を使って、外国人参加者と事前勉強会の知識を共有できました。外国人参加者は、事前にメールで発表内容を伝えておきました。そのため、スライドを用いた発表にスムーズに入ることができました。

当初、共有し原因の中から、共通する原因を抽出し、その原因に対して、解決策を提示する形を取るつもりでした。しかし、各国の状況があまりに違いすぎるため、共通する原因について解決策を提示するのは困難ということが分かりました。そこで、解決策を提示するのではなく、既存の雇用システムをよりよいものにして提示することにしました。この時点で、解決すべきシステムは、Course mismatchとContract employmentの2点です。

さらに、女性の働く環境についても議論しました。日本、韓国は比較的、女性労働者にとって働きにくい環境です。一方、フィリピンは女性にとって非常に働きやすい環境です。そのため、フィリピンをモデルとして、日本、韓国の女性の働き環境をどのように改善していけばいいか議論しました。議論の結果、女性の権利を政治、メディアの面から高めていくことで、女性の働く環境を改善するように結論づけました。

◆　分科会4　［システムの改善案検討①］

まず、Course mismatchの問題について議論しました。具体的には、Course mismatchの良い点、悪い点を抜き出し、それが誰にとっての良い点か悪い点を明確にしながら議論しました。

議論の結果、Course mismatchは多くの分野を学べる可能性があるので、私達にとってはスペシャリスト、ゼネラリストのどちらにもなりうるという利点があることを導き出しました。また、企業にとっては多様性のある学生を採用できるという利点があります。一方、Course mismatchには、企業が専門性のない学生を再教育しなければならない事、学生自身の勉強への意欲の低下といった悪い点があります。しかし、この点に関しては、以下のようなシステムで解決策を提示します。

まず、学生はアカデミックな授業が実用的な授業をとるか選択できます。そうすることで、学生は自分の選んだものを追求できるため、勉強への意欲の低下を防ぐことができます。そして、企業に入ってから、アカデミックな事を学んできた学生と実用的なことを学んできた学生の混合チームを作ることで、両者の知識を共有できます。この過程を通せば、若手間である程度の知識共有が行われるため、企業は社員育成コストを削減できます。これをEducational Solutionとしてまとめることにしました。

◆　分科会5　［システムの改善案検討②］

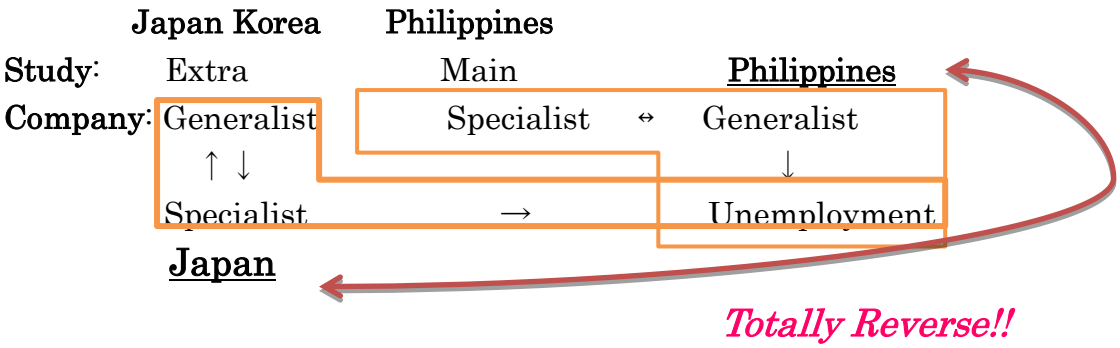
前々回の分科会ではContract employmentについて議論する予定でした。しかし、この問題を話し合うには契約制度や企業の経済状況が大きく関わってくるので、なかなか議論がしにくいことが分かりました。そこで、Contract employmentについての議論ではなく、これまでしてきた議論をより深く考えることにしました。

そのため、前々回の分科会で議論したWomen’s working situationsの改善が、若者の雇用問題の解決にどう関係してくるのか具体的に考えました。その結果、以下のように、女性の社会進出の保護が人口増加につながり、それが市場の拡大、雇用の増加につながるというモデルを導きました。これをSocial Solutionとしてまとめることにしました。

◆　分科会6　［システムの改善案検討③］

この時間はEducational Solutionを、私達のテーマである若者の雇用問題とより具体的に結びつけるための論理の補強を行うことを目的としました。そこで、現状を把握し、なぜ改善が必要なのか、を検討し、それぞれにおいて国別と、一般的なモデルを提示しました。

その結果、フィリピンと韓国、日本は状況が全く逆ではありますが、両者の状況において、私たちの作成したモデルが若者の雇用問題に機能することが確認できました。



◆　分科会7、8　［プレゼン方法の検討、練習］

これまでの議論で、Educational Solution、Social Solution、What we want to work for?という大きく分けて3つの内容について議論しました。そこで、この時間はどのように上記3点を効果的に発表するか考え、プレゼンを作成し始めました。

私たちは、最初の発表者であることもあり、見ている方々に出来るだけ、インパクトを与えようと思い、視覚的な図を多用することを意識しました。

⑤　個人の感想

昨年、参加者としてISC57に参加して、世界の人々と、現実の社会問題について議論するという貴重な経験をさせていただきました。これをきっかけに私は、「国際」というものに興味を持ち、自分の視野を広げて活動することができるようになった気がしています。私をいい方向に変えてくれたISCに何らかの貢献をしたいと思い、今回、ISC58にテーブルチーフとして参加することを決意しました。

これまで、このようなイベントに参加者としては参加していましたが、ISC58は私が、運営側にたって活動する初めてのイベントとなりました。運営側になって初めて、多くの人動かし、運営することの難しさ、責任の重さを実感しました。特にテーブルチーフとして、参加者を楽しませつつ、時間内に議論をまとめるという重圧は私にとって初めてのものでした。こうした重圧を乗り越えることができたのは、分科会内容の構成の相談に乗って下さった方々、参加者の皆様、ISC58のスタッフのおかげです。この場を借りて、改めて感謝の意を表したいと思います。

テーブルチーフとして、ISC58の運営に関わることで、ファシリーテーション力、偏見のない価値観をもつことができました。しかし、それらはまだまだ不十分です。今後、それをさらに伸ばしていき、世界に貢献できる人材になれるよう努力し続けたいと思っております。

分科会Ⅱ

有限資源の実用的活用について

～30 年先を見据えて～

テーブルチーフ　西堀祐大朗

① はじめに

この度、多くの方々のご協力を預かり、第二分科会での議論が無事に終わりましたことを、この場を借りて心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。経済人コー円卓会議日本委員会事務局長の石田寛様をはじめとして、会議運営の知識をご教授くださった多くの方々にも、改めて感謝申し上げます。

② 議題の背景、現状、およびその考察

米環境 NPO、Global Footprint Network は、「2030 年までに第 2 の地球が必要になる」と発表しました。国連の推計では、2011 年 10 月 31 日をもって世界の人口は 70 億人に達し、国連人口基金(UNFPA)の世界人口白書には 2050 年には 93 億人に達すると書かれています。こういった状況の中で問題視されているのが「地球にある資源の運用方法」です。私たち人類は生活していく上で資源を使っていかなければなりません。しかし、資源が有限であるという事実、そしてその資源を利用する人類の数が増えてきているという事実を考慮して、今のままの資源運用のやり方では、次の世代にしっかりとした生活基盤を残していける可能性は限りなく低いとされています。

長期的な視点においても、資源濫用による地球環境への懸念が大きくなっています。このままでは環境汚染はどんどん深刻化し、二次災害も発生しかねません。この先の社会を担う世代に生活の基盤を残していけるように、今を生きる私たちが、現在の資源の活用法を考え直さなければなりません。このように問題意識を感じたのがこの議題を第二分科会で取り上げた大きな理由です。

しかし、この議題は非常に難しく、日本人参加者、外国人参加者双方が話し合える期間が 1 週間だということを考えると、内容をあらかじめ狭めて議論を進めていくべきだという結論に至りました。そのため、**枯渇性資源**と**再生可能エネルギー**に重点を置き、さらに、本会議が始まるまでに開かれた、日本人参加者による計 2 回の事前勉強会でおおまかな議題内容を決めていきました。そしてそれらを facebook の活用によって外国人参加者と連携をとることで、意見

を出し合ってもらい、できる限り参加者全員が納得のいく形で本会議に臨めるように努めました。

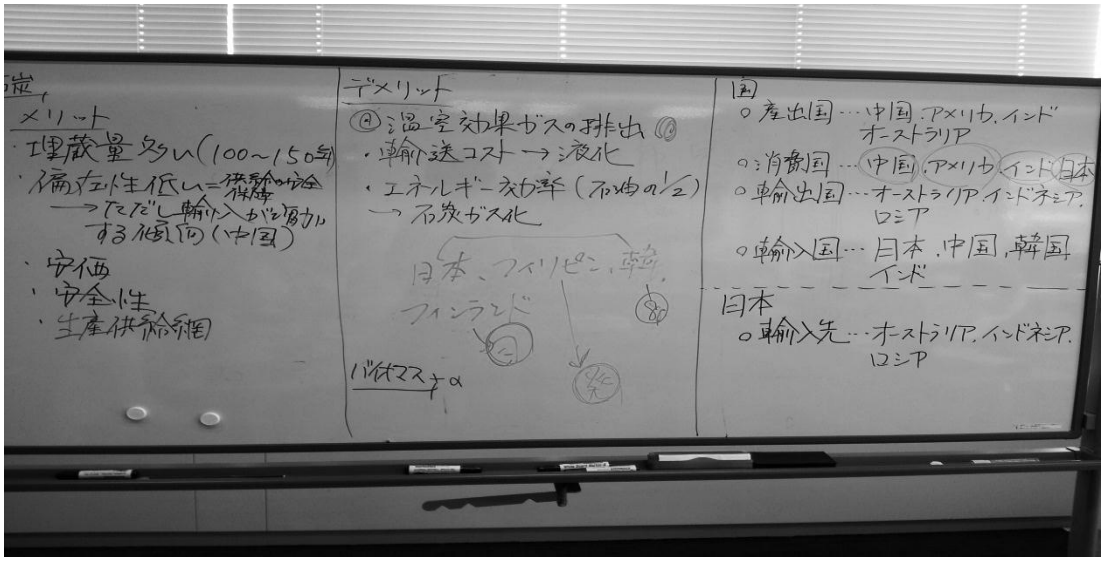
③　事前勉強内容

◆　プレ ISC

日本人参加者が初めて顔合わせをする機会だったので、まずは仲良くなってもらうことを心がけました。このプレ ISC では資源問題に関する議論は行わず、アイスブレイクを含めた自己紹介からはじまり、この ISC58 に何を求めるか、不安なことはあるか、自分がどうなりたいのか、といった内容をポストイットに書いてもらい、全員に共有を行いました。共有の中で各自の共通点や性格も少しずつわかるようになったのか、後半は談笑する姿が多く見られたように思います。私自身も、日本人参加者が何を考え、この会議に何を求めているのかを客観的に把握できたため、非常に効果的だったと考えています。後半では英語のみで会話をしてもらい、お互いの意思疎通を英語で図るという、本会議に向けての準備を行ってもらいました。また、TED で英語の動画を視聴し、それについての議論を行い、全員のリスニング力を確かめました。最後に私がこの分科会を取り上げた理由を聞いてもらい、現状、問題点、この議題に対する考察などを話しました。本会議に向けて、まずは枯渇性資源と再生可能エネルギーに対する知識量を上げることを目的として掲げ、プレ ISC を終えました。

◆　事前勉強会

第 1 回目の勉強会では、石油、石炭 2 つの枯渇性資源を利用するにあたってのメリット、デメリットに加え、現在の消費量が著しく多い国々を調査し、プレゼンテーションを行い共有しました。結果、デメリットとして環境負荷が高いことが多く挙げられ、参加者自身も枯渇性資源の濫用の危険性というものを実感することができました。そしてその枯渇性資源を多く消費している国として、日本、アメリカ、中国など、現在先進国と呼ばれる国、急激に発展を遂げている国に対して問題意識を投げかけることを決めました。



第 2 回勉強会では、第 1 回同様、再生可能エネルギーについての調査を共有してもらいました。結果、再生可能エネルギーにはメリットの方が多く、場所を選べば極めて持続可能であり、環境負荷が小さいという結論に至りました。市場構造、実現可能性という観点から、その再生可能エネルギーが発展している国々としてスウェーデンやデンマークといった北欧の国々が話として持ち上がり、本会議でもこれらの国々を参考にしていくことを決めました。

④　本会議内容

◆　分科会 1　［顔合わせ］

日本人参加者と外国人参加者が初めて顔を合わせる場だったので、自己紹介を全員に行ってもらいました。1 時間ほどの時間しかなかったため、そのあとは趣味など自由に質問してもらい、お互いを知ることに時間を割いてもらいました。共通点を多く見つけられたのか、終始和やかな雰囲気で過ごすことができました。

◆　分科会 2、3 ［意識共有、枯渇性資源および原子力発電の考察］

まず本会議までに共有していた情報等を、パワーポイントを用いてわかりやすく説明していき、改めて全員に自分自身の気持ちを伝えました。まず、国民の満足度や環境への負荷などから、真の「国の幸福度」を計る、HPI(Happy Planet Index)という理論について述べられている動画を視聴してもらいました。この指数では、日本やアメリカといった、先進国と称され資源を多く使う国々は、資源消費量が 1/4 であるコスタリカなどの国々よりもはるか低い位置にあります。このことから、資源の濫用をしなくとも、我々は十分な生活を送れるということを確認し、問題提起の際に取り上げることにしました。その後は各自がこの分科会に対して思うこと、資源問題への意見、どのように議論をしていきたいのかということを自由にプレゼンテーション形式で発表してもらいました。外国人参加者からは、自国の資源運用体制はどうなっているのか、といった追加情報も提案してもらいました。その後、枯渇性資源の濫用国として、事前勉強会で取り上げた日本、アメリカ、中国について日本人参加者に問題点を発表してもらい、その後、何が原因なのか、何故使い続けるのか、2 つのグループに分かれ話し合ってもらいました。その中で、経済成長、強欲、価格といった要素に歯止めをかけるべきだという結論に至りました。また、枯渇性資源濫用による汚染によって多くの人が命を失っている事実も、再生可能エネルギーへ移行する大きな理由の 1 つとなると考えました。

再生可能エネルギー移行への議論をする際に、歴史的に見て原子力発電に対しても同様に話すべきだという声が本会議までに出ていたため、東日本大震災で事故が起こった日本と、原子力発電への依存度が高いフランスについて日本人参加者から発表してもらい、それ以降は原子力発電に対して持つ印象を全員で話し合ってもらいました。やはり事故が起こった際の危険性に敏感になる参加者が多かったです。極めて安全、かつ事故が起こらないものでなければならないというのが参加者の考えでした。実際に原子力発電は安価で非常に効果的な電力供給が可能なため、この技術を重視する国は非常に多いという意見もありました。この分科会は再生可能エネルギーに焦点を置い

ているため、原子力発電に対しては深く触れない、という方向性で議論がまとまりました。

◆ 分科会 3、4 ［再生可能エネルギーの考察、解決策へのアプローチ］

次に、再生可能エネルギーについて考察する時間を設けました。太陽光発電、風力発電、水力発電、バイオマス発電、地熱発電など、さまざまな観点から発達している国々を日本人参加者に発表してもらい、なぜそれらが発達しているのかを探っていきました。原子力発電に着手していた国々が、事故を契機に再生可能エネルギーへの移行を基盤から進めていくという背景が指摘されたり、実際の法整備の詳細を話し合ったりなど、こちらに関してはより深い議論ができたように思います。さらに、再生可能エネルギー利用におけるメリット、デメリットを、ポストイットを用いてブレインストーミングを行いました。

以上、枯渇性資源、原子力発電および再生可能エネルギーの 3 点を網羅したあとで、どのように自分たちの答えを出すのか、議論を行いました。議論の結果、制度的視点(Systematic perspective)と技術的視点(Technological perspective)の 2 つの観点から探り、さらにそれらが誰のためのものなのかをはっきりさせる方向で進めることにしました。前者からは、固定価格買い取り制度(Feed in Tariff)、スマートグリッド(Smart Grid)、排出取引(Emissions Trading), 環境モデル都市(Model City)、教育制度改革、税制度など、持続可能かつ機能的なものが挙げられました。一方で後者からは、LFTR(Liquid Fluoride Thorium Reactor)、Aero generator X といった近年注目されている新技術を中心に議論を進めました。低価格、高い効率性、極めて安全であること、規模の経済性が期待できるもの、という要素を共通点として話をすることを意識しました。

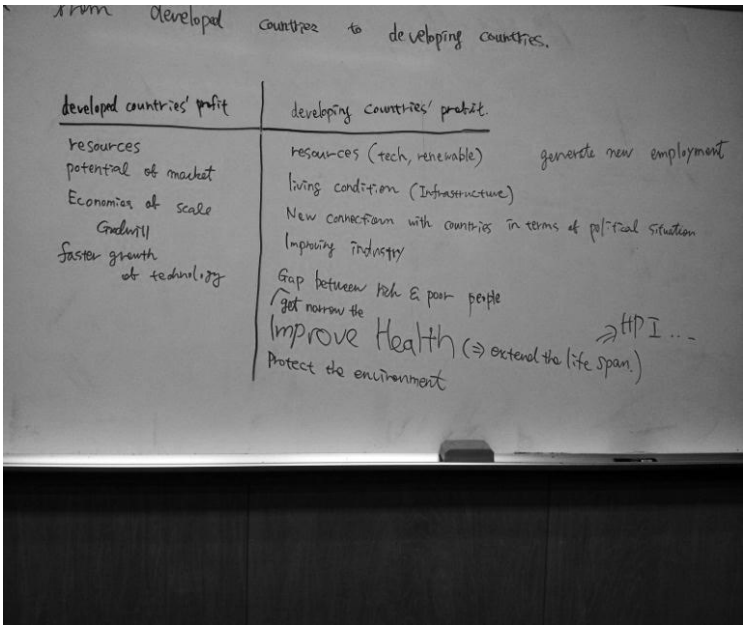
次にこれら解決策が誰のためのものなのかを考えました。大きな分類として、定義が難しいですが、先進国と発展途上国の 2 つに対してアプローチをかけることにしました。議論が進む中で、先進国には資本と技術が存在し、途上国にはそれらが不十分であると指摘されました。解決策をどのように適応させてい

くのかを議論するため、先進国、途上国双方から 1 つの例を挙げ、適応法を考えていくこととしました。先進国は、成果発表会の聴衆の比率を考えて、**日本**を提示する方がより懸命だと判断しました。また、途上国に対しては、ボツワナ共和国、南アフリカ共和国、ブラジル、インド、メキシコ、インドネシアをさらに調べ、最終的に 1 つに絞ることにしました。

◆ 分科会 5、6 ［解決策の具体的な施策方法の考察］

参加者から各自、途上国の候補国について調査してきてもらった内容を発表してもらい、各々の意見を聞いた上で、**ボツワナ共和国**を途上国として提示することにしました。HPI が最下位であること、人間開発指標(HDI)が発展していること、潜在的再生可能エネルギー発達要素が高いということが大きな決め手となりました。

次に、日本への適応方法を議論しました。日本では FIT が導入され、排出取引が廃止されているため、税制度からのアプローチ策を考えていきました。私たちは炭素税、原油税に注目し、他国の税率と比べて日本が極めて低いことを発見しました。結果、日本に対しては効率的、持続可能な高い税率を原油、炭素にかけるという提案をすることを決めました。



どのように途上国にも反映させていくかについても、同様に議論を重ねました。ボツワナ共和国は資本および技術が乏しいため、これらの供給方法を考えました。先進国と途上国双方に利益が出る形で助け合うことはできないかと考え、お互いの利益となるものをリストアップし、まとめていきました。先進国に対しては規模の経済性、市場潜在価値の向上などを挙げ、途上国に対しては生活水準の向上、新規雇用の創出、政府間の取引数の向上、HPI の向上などを挙げていきました。最終的には、先進国と称される国々が、途上国に対してできる限りの協力体制を整え、同時に新技術を導入し、枯渇性資源主体の運用体制から再生可能エネルギー主体のそれへと移行を促していく、という構図を作成しました。ドネーションという

形だけではなく、長期的な視点で、供給される側だけでなく提供する側にもしっかりとした利益が与えられるような仕組み作りが大切だと結論付けました。問題となっていた原子力発電に関しては、これ以上新たな原子力発電所を建設する必要性はないということ、LFTR はその安全性と効率性から、原子力発電の新たな可能性を広げる技術であると提案することを決めました。

◆ 分科会 7、8 ［プレゼンテーションに向けて］

まず成果発表会の発表時間を考慮しながら、この分科会を通して聴衆に何を伝えたいかを中心に議論を進めました。次にプレゼンテーションの形式を決定しました。スライドの配置の仕方、発表者など、プレゼンテーションの大枠を作っていきました。スライドは補助、主役であるプレゼンターに視線が集中するような内容を構成していきました。作業中はグループを作成し、分担して各々が準備を行いました。プレゼンターに関しては完成次第練習を始めてもらい、夜まで何度もデモンストレーションを繰り返しました。

⑤ 個人の感想

自分の未熟さが浮き彫りになった 1 週間でした。テーブルチーフという大役を任され、プレッシャーの中で準備を重ねて臨んだ本会議でしたが、何度も仲間に助けられたことを覚えています。議事進行役として英語を使うのと、ふだんの会話で英語を使うのとでは大きな差があり、後者に慣れていた分ギャップに苦しむことが多々ありました。

それでもここまでやれたのは、環境問題というものに私たち学生からぶつかっていかなければならないという、分科会発足当時の気持ちをずっと持ち続けていたからだと思います。プランがなかなか組めず、苦しいと感じた時ほど、自分の負けず嫌いの性格が背中を押してくれたのか、意地でもこの分科会を実りのある、未来に対して少しでも前進できるものにしてみせるという気持ちが強くなっていきました。

同時に、仲間にも恵まれた分科会でした。第二分科会は全分科会の中でも最も人数が多く、非常に賑やかな場となっていました。オンとオフの切り替えがうまく、進行役のテーブルチーフとしてではなく、参加者と同じ目線で物事を一緒に考え、悩み、話し合う場面も何度もありました。それだけ、この第二分科会が一体感を感じられる場であったということです。

学生として、国境を越えて話し合うことが、いかに楽しく、難しく、これから先の社会で求められているものであるということを知れた 1 週間でした。数年後社会に出た後でも、この会議での経験が大きな糧になることは間違いありません。次の世代を担う私たち学生には、世界を変える力があると信じていま

す。これから先の国際社会で活躍できる人財となるためにも、現状に満足せず新しいことに挑戦していきたいと強く思っています。

本当にありがとうございました。

テーブルⅢ

貧困の解決を目指して

～新たな支援の形を模索する～

テーブルチーフ 香田華奈

① はじめに

この度、多くの方々のご協力とご支援のもと、第三分科会が未来を据えた有意義な議論の場を持つことができたことを心より深く感謝いたします。特に、お忙しい中、テーブルテーマの相談にのっていただいた経済人コー円卓会議日本委員会事務局長の石田寛様、フィールドワークで世界での貧困の状況や国際機関の取り組みについてご講演いただいた日本ユニセフ協会の松本和子様、また日本ユニセフ協会での展示物の見学を受け入れてくださった日本ユニセフ協会の皆様、貧困問題についてご教示頂いた様々な方々に、この場を借りて改めて感謝申し上げます。

② 議題の背景/現状

現在、１日 2 ドル以下で生活する貧困層は世界の約半数を占めるといわれ、劣悪な衛生環境、教育機会の喪失、不安定な収入、感染症など様々な問題に苦しんでいます。その解決に向け、国連のミレニアム開発目標をはじめ、第二次世界大戦以降、発展途上国における援助活動は国際機関、政府、NGO などにより、地域・数とともに飛躍的に増加しました。また例えば、ユニリーバがインドの貧困層を対象とした石鹸を販売し、ビジネスの中で衛生環境の向上に貢献したように、「BOP ビジネス」と呼ばれる貧困層(BOP)を市場としたビジネスや CSR により民間企業も参加しており、援助へのアプローチは多岐にわたっています。

しかし、その一方で依然として貧困撲滅には至っておらず、現在と同じ支援を続けていて将来貧困問題は解決されるだろうかと漠然と疑問を抱いている学生も多くいます。このため、各国の学生たちが貧困解決のために何が必要なのか考え、価値観や意見を共有することはこれから世界で活躍していくための第一歩につながるのではないかと思い、テーマを設定するに至りました。

「貧困」という大きなテーマであるため、議論の内容が曖昧にならないように対象を絞り、現実味のある議論を目指しました。対象国は安定的に経済成長を遂げている一方で、富裕層と貧困層の格差が問題となっているフィリピンとし、さらに細かい地域とトピックについては参加者で話し合って決め、現状に関する情報を集め、それをもとに解決のためのプランの作成を最終目標にしま

した。

③　事前勉強内容

◆ プレISC

日本人参加者の顔合わせだったため、各々が貧困に対する問題意識の共有，貧困問題の分類、対象地域とトピックの候補の選定を行いました。

１つ目については、それぞれが問題意識を持っている貧困問題に関してプレゼンテーションを作り発表し、共有しました。事前に調べたり、他の人の発表を聞いたりする中で貧困に対する理解を深めることができたと思います。

貧困問題の分類は、ポストイットを用いて「貧困」から思いつくワードを挙げた後分類し、因果関係などの相互関係の把握を行いました。この作業の中で、貧困問題がそれぞれ密接に関係していて切り離すことが難しいこと、いくつかのトピックに参加者の興味が分類できることなどが分かりました。

今までの作業をもとに、対象地域とトピックの選定において、参加者の興味が「スモーキーマウンテン」と「都市の貧困」に大きく分類できることから、それが顕著であるパヤタス地区とトンド地区に絞り、勉強会で決定することにしました。

◆ 事前勉強会

事前勉強会では、プレ ISC で割り振った担当地域に関する問題をそれぞれ調べ、再度発表、質疑応答を行い、その後対象地域と問題を絞ることとしました。

プレゼンテーションでは、トンド地区での栄養失調、雇用問題、教育、またパヤタス地区での住居の問題、健康問題を取扱いました。その後の議論の中で、スモーキーマウンテンでの貧困解決には、まず閉鎖が必要であり、その後も都市と同じ問題が残る可能性が高いため、かつてスモーキーマウンテンがあったトンド地区に焦点をあてることとしました。また、栄養失調・教育も貧困解決には非常に重要な問題ではありますが、雇用がうまれ、ちゃんとしたお金が稼げるようになれば改善される面もあると考えました。また、国全体で長期的に改善する必要があり、学生である私たちがプランを構築するには雇用のほうが面白いアイディアが出せるのではないかということでトピックを雇用問題に設定しました。その後外国人参加者にもトピックに関して意見を聞き、対象地域とトピックを確定しました。

④　本会議内容

◆ 分科会１　［アイスブレイキング］

全参加者が初めて顔を合わせる時間であったので、自己紹介を行い、そのあ

と自由に話しました。全体では人数が多いため、3 つのグループに分けてメンバーを変えながら 15 分ずつ自己紹介を行いました。小規模であったため話しやすく、意外な共通点などを見つけて仲良くなることができていました。

◆ 分科会 2 ［貧困問題に対する分析］

本格的に議論に入る前に、テーブルテーマを設定した目的とディスカッションで目指すゴールについて全員で共有しました。また、貧困問題全体に対してどのような問題が存在するのかについて各々ポストイットに書き出し、テーブルの上に並べて共有しました。初めて知る貧困問題もあった参加者もおり、フィリピンに限らず世界に存在する貧困問題に対する認識の統一を図りました。

次に、自分たちが考える援助の理想像について考え、どのような援助を目指すべきか考えました。その中で、モノをあげて依存を招くような援助ではなく、知識や技術を伝達して自立を促すような援助を目指すべきだという見解に至りました。

◆ 分科会 3 ［対象地域の現状分析］

次に、フィリピンのマニラにおける現状について日本人参加者とフィリピンからの外国人参加者にプレゼンテーションを行ってもらい、現状に関する知識を共有しました。

また、「安定した雇用（stable employment)」に関して日本人と外国人参加者で理解のずれがあったため、「無職、または低賃金（No jobs or low salary to live)」と再定義し、そこから起こる問題と、その原因を分析しました。中でも原因の中で、人口過剰で就職機会が少ないこと、教育の重要性というものが重要だと考えました。しかし、教育を改革することと雇用を創出することは同時にはできないため、教育問題は家計が安定すれば、子供が教育を受けられ、安定した職業につけるという、よい循環が生みだすという解決へのアプローチもあり、雇用機会を増やすことに焦点をあてることを再確認しました。また、女性と男性の雇用率の格差に問題を感じ、CSR やソーシャルビジネスによる女性雇用の支援に魅力を感じました。

The level of education and the gender gap employment

(%)

	1997	2000	2003
初等教育修了 Graduating elementary level of education			
全体	47.8	45.4	34.3
男性	61.5	57.5	43.6
女性	33.6	32.8	24.3
中等教育修了 Graduating junior high school level of education			
全体	48.9	48.1	49.8
男性	64.0	60.9	63.9
女性	33.6	34.8	35.7
高等教育修了 Graduating high school level of education			
全体	56.6	54.3	56.8
男性	64.5	61.0	64.1
女性	49.6	48.4	50.4

出所）Son 2007 "Human Capital and Economic Growth—Background Report to Philippines Critical Development Constraints."

◆ 分科会４ ［フィールドワーク］

視野を広げ、議論に現実性を持たせるために、ユニセフハウスへフィールドワークとして行かせていただき、松本和子様に講演をしていただきました。世界の貧困の現状やユニセフの援助の仕組みなどについてお話をいただいて、参加者の理解を深めました。

また、援助を解説する展示を見学させていただきました。参加者も実際に援助で使われている道具を目にしたり手に取ったりする機会はめったにないため、非常に興味深く見学しており、良い経験になったと言っていました。雇用に直接関係するしないにかかわらず、国際機関について具体的なイメージをもったり、ほかの話に応用することができたりした点で、その後の議論の活性化に大いに役立ちました。

◆ 分科会 5 ［国際機関・NGO・企業の分析］

参加者に雇用創出に関する国際機関・NGO・企業のそれぞれの援助について事前に調べていたものを発表してもらい、それを基盤として「援助をする際にほかの主体に比べて優る点・劣る点はなにか」ということについて分析しました。実際にどのような援助を行うことが可能なのか、参加者が具体的なイメージを持つことができ、これから自分たちがプランを構築していく中でどのような主体を使ったり組み合わせたりするのが良いのか考える、よい足がかりとなりました。

◆ 分科会 6、7 ［プランの構築］

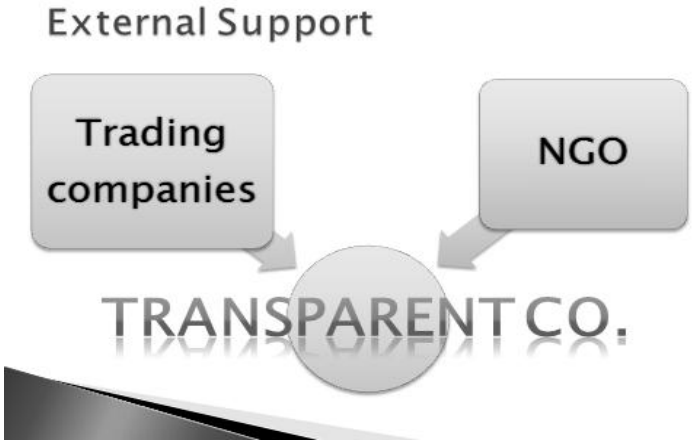
今までの分科会での分析・知識付けを踏まえて、実際のプランの構築に入りました。まず、プランで雇用を創出することによって支援する対象について定め、それからブレインストーミングを行う中で詳細について話し合っていき、最終的に一つのプランとして構築していく、という工程を踏みました。

・全体像

対象に関しては、初等・中等教育までの女性の雇用率が男性に比べて非常に低いことに問題意識を感じ、このような人々に雇用機会の提供を目標としました。

次にビジネスプランを考え出すためにブレインストーミングを行い、「salvation army」というシステムを出発点としたプランを構築しました。

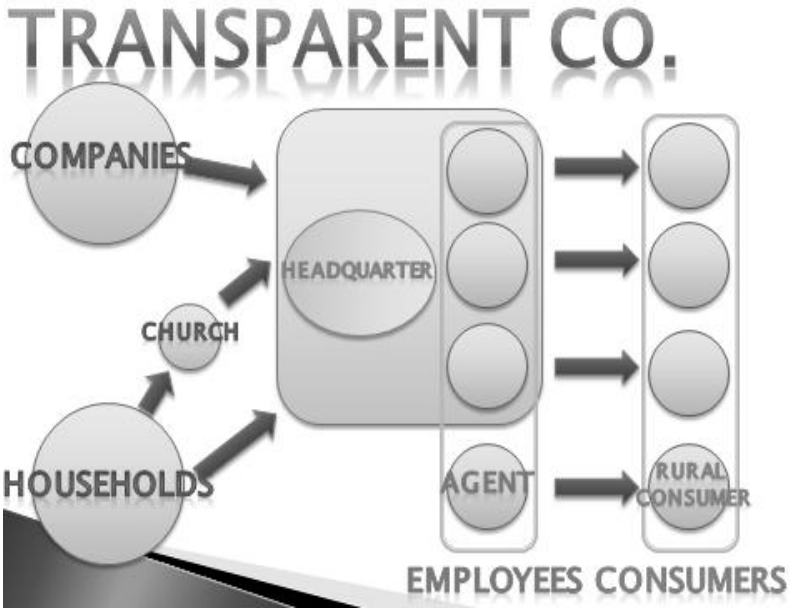
Salvation army とは、非営利目的の援助であり、各家庭が、家に眠っている未使用の品を寄付し、それを貧困に苦しんでいる方が安価な値段で売ることで収入を得るというものです。この仕組みを利用したプランの構築を目指しました。私たちはより長期的な支援の必要性と現地のネットワークの必要性を感じたことから、それぞれで優位性を持つ企業と NGO を主体に選びました。



・援助の細かい仕組み

全体像が決まった後は細かい仕組みについて詰めていきました。まず、transparent co. という会社が運営する店舗を立ち上げ、そこで教育を受けていない女性に職業訓練をしたのちに販売業務を行わせます。従来、販売品は各家庭からの寄付で集めますが、供給が不安定で、依存を招く点で支援の理想形と異なることから、ここを改善することにしました。長期的で安定したものにするためにここにビジネスを取り込み、さまざまな小売企業と、在庫処理に困っているものを格安で売ってもらうという契約を結ぶことによって、供給の安定性と継続性を担保しました。小売企業も処理費用を削減することができ、破棄するものから利益を回収できるため、メリットが生じます。このマーケティングは、企業が得意とする分野であり、CSR やマニラの市場データの欲しい貿易会社が、支社を通じた世界ネットワークを利用してサポートするという仕組みにしました。また、教会というフィリピン文化をとりこんで、家庭での未使用品は教会か直接店舗に持っていくシステムも考えました。

現地の店舗での運営は､現地のネットワークを持つ NGO が担当することとし、ビジネスとして安定したのち、NGO は撤退するという議論に至りました。NGO はバランガイというそれぞれの小さな地域のリーダーとのネットワークを持っていることから、各リーダーを通じてコミュニティを網羅し、教育を受けていない働きたい女性を集めるというシステムを構築しました。また、更にフィリピンにビジネスとして定着しているデリバリーサービスを組み合わせることで、雇用できる女性の数を店舗以外でも増やせるようにするだけではなく、農村地域にも安価な品物を供給できるという付加価値を生み出せるようにしました。



・影響について

全体像がきちんと見えた後は、従来就職できず困窮した生活を強いられていた高等教育を受けていない女性に雇用を創出することができ、またごみを削減することができるなど、私たちの提案が与える影響について分析しました。

◆ 分科会 8、9 ［プレゼンテーションの準備］

サマリーでの発表に向けてパワーポイントを作成し、議論した中でどの点を発表し、どこに重点を置くかなどを議論しながらプレゼンテーションの練習をしました。パワーポイントは理解の補助として、できるだけシンプルにし、口頭でわかりやすい説明を行うことや、ゆっくり話すことなどを意識して練習しました。

また、質疑応答に備えてみんなで考えられうる質問を列挙し、それに対する答えを作成する中で、さらにプランをつめていくこととしました。

⑤ 個人の感想

今回 ISC58 において、テーブルチーフをさせていただく中で様々な経験をさせていただきました。特に議論を回していくことのむずかしさ、全員に議論を理解させ巻き込んでいくことへの大変さなどを実感しました。また、議論を実りあるものにしなければならないという重圧は非常に苦しいものであり、自分の未熟さを痛感しました。

しかし、それと同時に、貧困問題という非常に複雑で一見解決が困難に思えるような問題であっても、複数人で価値観やアイディアをぶつけていく中で、自分一人では考え付かなかったような、斬新なアイディアや考え方に出会えるという、ディスカッションの面白さを改めて実感しました。また、異なる国の学生との間では、私たちが考えている「当然」がほかの国では違い、認識のずれが生じるということも分科会の中で何度も体験しました。文化の多様性を感じるとともに、国際社会で活動するにあたって、何事も当然と決めつけて取り掛かってはいけないという言葉の意味を、身をもって実感したと思います。

貧困という一朝一夕には解決できない問題ではありますが、こうやって学生のうちから真剣に自分の考えと向き合い、人の意見を聞く中で様々な角度から考えることの重要性を改めて感じ、この活動に参加できたことに喜びを感じています。このような貴重な機会を与えていただき、様々な方面から協力してくださった皆様に大変感謝しています。今回経験したこと、感じたことをここでおわらせるのではなく、次につなげるためのステップとして、このような取り組みに積極的に参加し、世界の明るい未来の実現のための一翼を担えるような

人材になれるよう、日々精進していきたいと思っております。

テーブルⅣ

移民の社会統合

～多文化主義の再考～

テーブルチーフ　松尾あつみ

① 議題の背景

近年、特にヨーロッパ諸国では移民との摩擦が顕著になっています。フランス、イギリスでは移民による暴動が起こり、2010年以降、ドイツ・イギリスの首相、フランスの大統領は揃って自国の「多文化主義」は失敗だったと語りました。ノルウェーでも昨年2011年夏、残忍な連続テロ事件が起こったことも皆さんの記憶に新しいと思います。

一方で日本は、2010年の法務省の統計によると外国人登録者数は210万人を超え、人口比で言うと1.7%に及んでいます。これは移民が人口比の約8%を占めるドイツ・フランスなどを含むヨーロッパ諸国に比べると低い数字ではありますが、在日朝鮮人や日系ブラジル人の教育、雇用問題は特に彼らの集住地域で大きな問題となっており、現在は地方自治体が中心となって「多文化共生」に向けた取り組みが行われています。

「多文化主義」は、各マイノリティ・グループの文化を平等に尊重しようとするがゆえに、それぞれの差異を強調し、逆に彼らの社会統合を妨げているという批判もあります。今後、ますます世界はグローバル化し、国家を超えた人の移動がより簡単に、頻繁に行われると考えられます。未来の社会を担う私たち学生が、多様な文化を持つ人々がより平和的に共存できる方法を議論する必要があると考え、この議題を設定しました。

② 背景を受けて

私たちが議論の目標としたのは、移民の「文化的統合」です。まず、統合という言葉は今ヨーロッパ諸国で頻繁に使われています。統合とは、同化主義、多文化主義の失敗を踏まえ、移民の文化を尊重しながらも、社会全体の一体感も保持しようとする考え方です。

統合は、大きく3つに分類できます。選挙制度を整え、帰化条件を緩和するなどして目指す移民の「政治的統合」、雇用状況を改善することで目指す「経済的統合」、そして「文化的統合」です。私たちは特に最後の「文化的統合」に着目しました。それは、上の議題の背景で述べたように、文化の違いによって生じる摩擦を私たちがどう解決できるかを議論したいと考えたからです。様々

な学生が参加するこの国際学生会議という場で、実際に文化の違いを感じながら、実りのある議論を行えると考えました。

③ 事前勉強内容

◆ プレISC

プレISCは参加者が初めて顔を合わせる場なので、目標を以下3点掲げました。1.運営者・参加者皆が打ち解けて仲良くなる、2.参加者の英語力を把握する、3.移民問題を議論する意義・議論の流れを説明することで勉強会・本会議に向けてのモチベーションを高めてもらう、の3点です。

まず最初に、全員で軽く自己紹介を行った後、アイスブレイクとして「マトリクス自己紹介」を行いました。紙に自分の名前を書き、その周りに関心のあること、好きなものなど自分に関連する単語を書き出してもらってから、それを皆で見て質問したり、自由に雑談してもらいました。共通の趣味について話したり、和やかな雰囲気の中で、お互いのことを知ることができました。

次に、参加者に移民問題に興味を持ったきっかけを話してもらいました。その後、テーブルチーフがこの問題を議論する意義を説明し、議論の流れ、「多文化主義」についての説明も行いました。

続いて、全員で英語でのディスカッション練習を行いました。まずテーブルチーフから英語ディスカッションをする際に気を付けること（意見を言うときには結論から先に言う、意見には理由を添えるなど）を説明し、最初に「今までに行ったことのある国」について自由に話してもらってから、「タイムマシンがあったら過去か未来どちらに行きたいか」についてディスカッションをしてもらいました。終始和やかな雰囲気で、参加者の英語力も問題ないことを確認しました。

最後に、事前勉強会での課題を確認して、終了しました。

◆ 事前勉強会

事前勉強会は東京で、2回行いました。移民問題は国によって状況、背景も様々であるため、本会議では相当の知識が必要だと考え、2回とも参加者の知識をつけることを目標としました。

1回目は参加者にプレISCで割り振った国（アメリカ、カナダ、ドイツ、フランス、イギリス）についてそれぞれの移民政策の変遷をプレゼンテーションしてもらいました。次に、テーブルチーフが考える移民の「統合」(Diverse cultureとSocial Coherenceの両方が保護されている状態）を説明し、各国の移民政策の違いを簡単に説明しました。また、本会議で移民問題をどのように議論するかについて話し合いました。その結果、移民の貧困問題や法律・政治制度では

なく、文化にかかわる問題に絞ることにしました。具体的には、文化にかかわる移民問題を皆で出しあい、それをグルーピングしてグループごとに原因・解決策を話し合うこととなりました。英語のディスカッション練習も行い、その後異文化に実際に触れることを目的に東京・渋谷にある「東京ジャーミィ・トルコ文化センター」に出向き、センターの方にお話を伺ったり、モスクの見学をさせて頂きました。

2回目は再び参加者に各担当国について、それぞれどのような移民問題を抱えているか、プレゼンテーションをしてもらいました。そのあと、練習として、プレゼンで得た知識を使って実際に問題を出し、グルーピングを行いました。

④ 本会議内容

◆ 分科会1 ［アイスブレイキング］

テーブルの日本人参加者と外国人参加者が初対面する機会であり時間も限られていたので、お互いを知り、仲良くなることを目的に自己紹介を行いました。日本人参加者は5名で、海外居住経験がある者、在日韓国人など、皆ある国でマイノリティとして生活したことのある学生でした。その為よりリアルに、様々な視点からこの移民問題に関する議論が行えたと思います。外国人参加者はイスラエル、韓国からの2名でした。各自の自己紹介の際にほかの参加者に質問を仰ぐ形式で行い、自然に打ち解けることができました。

◆ 分科会2 ［各国の現状把握］

最初に、なぜ移民問題に興味を持ったのか、参加者に自由に話してもらいました。移民の暴動に見られるようにヨーロッパ諸国での増大する移民との摩擦、移民が多く住む国に済んだ経験、在日韓国人として日本に住んだ経験、Globalizationへの関心などが挙がりました。そのあと、テーブルチーフから、移民問題というグローバル・イシューを多様な背景を持つ学生が話し合う意義を説明しました。そのあと、「移民」・「文化」の定義、テーブルの議論で目指す「統合」の説明、勉強会で決めた議論の流れを説明し、外国人参加者と共有しました。テーブルで扱う「移民」とは、自国での経済状況が悪く、労働を目的に移住する経済移民であり、難民は含まない旨を説明しました。

次に、日本人参加者には勉強会で割り振っていた担当国の移民問題について、外国人参加者には自国の移民問題についてのプレゼンテーションをしてもらいました。イスラエルについては、移民の歴史から、最近の問題まで幅広い説明がありました。アラブ人とイスラエル人の分離、また最近の問題としてはスーダンからの移民が増え、経済的弱者となっている状況があるとのことでした。

また、徴兵制による軍隊への参加が多民族理解の良い機会となっているなど、興味深い話が聞けました。韓国については、経済移民がほとんどで、韓国語が喋れないため弱者に陥る場合が多いこと、また差別が強いことが挙げられました。

最後にテーブルチーフが日本に住むマイノリティの現状などについてプレゼンして、分科会を終了しました。

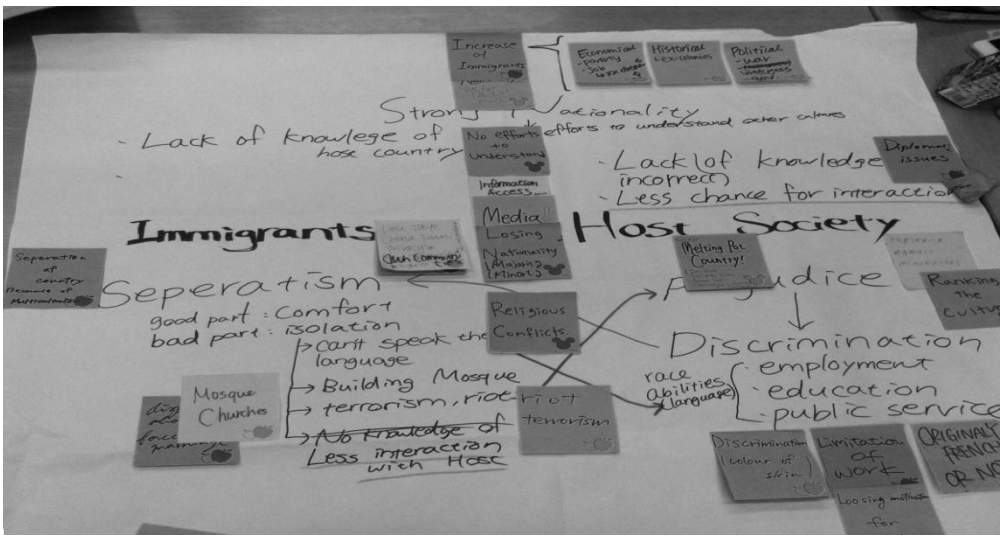
◆ 分科会3 ［問題共有とグルーピング］

まず、参加者に移民の文化的問題についてブレインストーミングしてもらい、ポストイットを使って皆で共有しました。その後ホワイトボードを使い挙がった問題を原因と結果に分け、似ているものをグルーピングし各グループの関係を図解化しようと試みましたが、グルーピングが容易ではなく、各問題の相互関係が複雑になり過ぎ、整理するまでに至りませんでした。しかし大きなグループとしては、結果側の問題として、Discrimination、Religious Conflict、Separatismの3グループが、その原因として情報へのアクセスが難しい状況、それによっておこる偏見などが挙がりました。

Discriminationとしては、肌の色・宗教・国籍などの違いによる就職時の差別、移民へのアパートの貸し出し拒否、学校でのいじめなどが挙がりました。Religious Conflictでは、ヨーロッパ諸国でのイスラームのスカーフ問題、モスク建設への住民の抗議などが挙がりました。Separatismとしては、移民のホスト社会への所属意識の欠如、チャイナタウンのような移民街の形成が挙がりました。最後に、今後その3グループに絞って議論することを確認し、終了しました。

◆ 分科会4、5 ［問題の相互関係の整理］

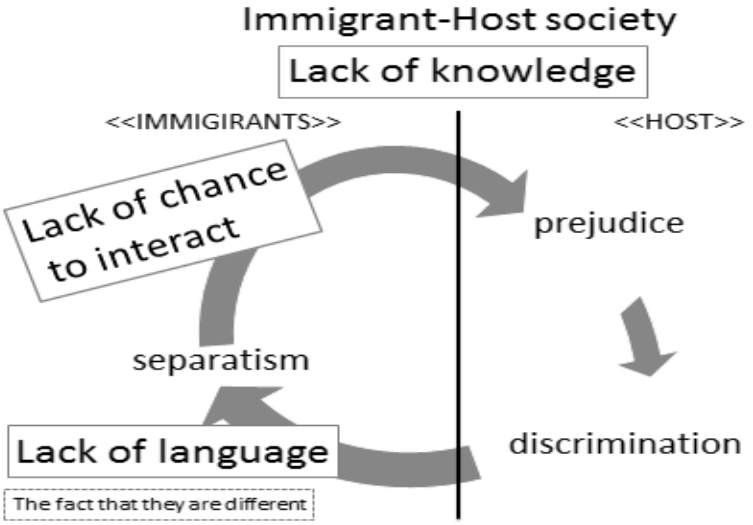
ここではまず、前回の文化的問題の相関図をもう一度整理しなおすことから始めました。具体的には前回出た問題を「移民側」、「ホスト社会側」の問題に分けて、模造紙に整理しました。その結果、移民側とホスト社会側の問題の共通の原因として、「移民の急増」⇒「移民・ホスト社会双方のNationalityの強化」⇒「お互いの文化に対する知識の欠如または誤解」、「交流機会の欠如」が挙げられ、これらの結果、移民側の問題として移民のSeparation、ホスト社会側の問題としてPrejudice、Discriminationが挙がりました。また、本質的部分での違いと上述した原因によって起こる問題としてReligious Conflictを位置づけました。そしてDiscrimination、Religious Conflict、Separatismの３グループについて話し合うことを再度確認しました。



その後Discriminationについての議論を試みました。まず、文化的差異による差別のより詳しい事例を参加者に挙げてもらい、似ているものをまとめて、それらに対する解決策を考えました。しかし、全員の知識が不足しており解決策を考えることが困難であったため、次の分科会までに各担当国内で行われている移民問題に対する施策を各自調べてくるという課題を出し、終了しました。

◆ 分科会6 ［問題の相互関係の整理②］

まず、再度前回の分科会で完成させた移民問題の相互関係の図を整理し、より簡略化しました。そして最終的に、Prejudice、Discrimination、Separatismの３つの問題が存在すると同時にそれらは他の問題が発生する原因にもなっている、すなわちこれらの問題は循環している、という結論に至りました。そしてReligious Conflictや昨今多くみられる移民の暴動を、この結果として位置づけました。



前提として、移民・ホスト社会のお互いに関する知識の欠如(Lack of knowledge)があり、そこから両者にはPrejudiceが芽生え、ホスト社会は移民に対してDiscriminationを行う。ホスト社会からのDiscriminationと、移民側の言語能力の低さ

(Lack of language skill)も手伝って、両者のSeparationが起こる。移民とホスト社会住民の分離により交流の機会が減り(Lack of interaction)、両者のPrejudiceは増幅する、という循環構造です。循環している問題を改善するためには、Lack of knowledge、Lack of interaction、Immigrants' lack of language skillにアプローチすることが必要だという結論に至りました。

◆ 分科会7 ［各国で行われている施策の共有］

前述した3つの問題に対して各国では何が行われているか、施策を共有しました。そしてそれらを①Education、②Education (Experience type)、③Actions which give opportunities to interact、④Mediaの４つのグループにまとめました。①としては公立学校での多文化主義教育、ESL(English as a second language)教育、ホスト社会に長年住む移民が新しく来た移民にボランティアとして行う言語教育、地方政府による無償の夜間言語学校、②としては教師が移民の国を訪ねて文化を理解するプログラム、交換留学、③としてはエスニック・レストラン、交流イベント（移民の国の食などを紹介するInternational fair、大使館主催のものなど）、宗教的な場所（教会、モスクなど）が他信徒や地域の人に開放されるイベント、様々な国からの移民が共に暮らすアパート（International apartment、フィンランド）、④としては③に挙げたイベントの宣伝、多文化主義を教えるTV番組・フリーペーパーなどが挙がりました。

◆ 分科会8 ［解決策の検討］

前回で出た各国の施策をもとに、それらをより効果的なものにするための案を皆で考えました。

・Education

１.多文化主義教育の普及：フィールドワークを取り入れ、実施する学校を増やす　２．言語教育：長年住む移民が新しい移民に文化も含めて教えられる場・学校を増やす、ESL教育を行う学校を増やす、移民労働者への言語教育を行う企業を増やす、また教える側の社員に報酬を与える

３．留学プログラム：移民が多く住む地域に派遣するなど国内でも行う、教師や学長も移民の国へ派遣する

・Actions which give opportunities to interact

１．交流イベント：メディアを使った宣伝の強化、開催団体が他の団体と協力してより大きなイベントを行い、人を集める

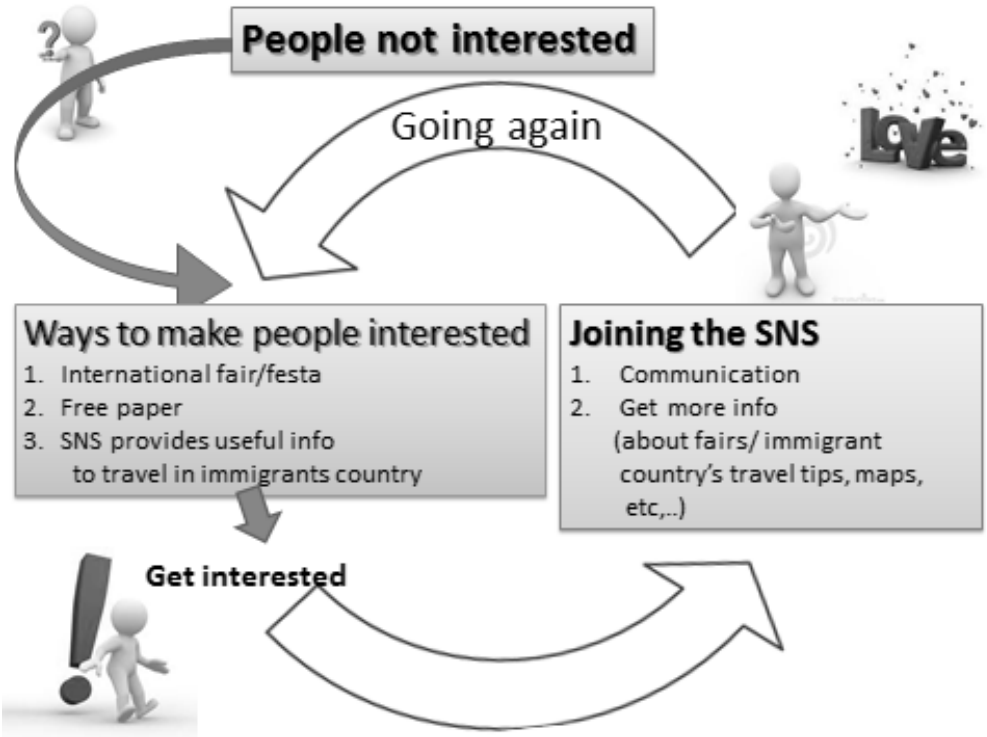
２．エスニック・レストランの数を増やす

・Media

１．多文化主義を教えるTV番組：子供を含め多くの人が関心を持ち見られるよ

うなドラマ仕立ての番組をつくる
２．多言語環境の創出：TV番組に移民の言語の字幕をつける、道路の標識・看板などで移民の言語をより多く使う（移民の言語習得の妨げになるとも考えられるが、言語習得の助けになり得、また孤独感を和らげ分離を防げる可能性に注目した）

また、ここで挙がった教育制度の改善、メディアの改善などを実現させる一つの手段として、SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）の活用も必要だと考えました。これらの解決策を現実のものにするためにはまず、もっと多くのホスト社会の人々が移民問題に興味を持ち、移民と実際に交流(Lack of interactionの改善)したり、または彼らの文化・彼らが置かれている環境について学ぶ(Lack of knowledgeの改善)ことで、移民を理解することが必要です。興味を持ってもらうきっかけとして、SNSを活用します。私たちが考えたSNSというのは、移民・ホスト社会の人々がインターネット上で交流する場であり、また文化交流イベントの情報や移民・彼らの国の情報が手に入る場でもあります。このSNSにホスト社会側の人々を集めるために、移民の国へ旅行する際に役立つ情報など、何か惹きつける情報を載せておきます。彼らはお互いの言語を教えあうなどすることで仲良くなり、偏見を和らげることも可能であり、そうすることで異文化に興味を持ち交流イベントに出かけることもできます。



◆ 分科会9 ［プレゼンテーション作成・練習］

2人1組ほどで1部分を担当してもらい、プレゼンテーションの作成、原稿作りを行いました。Preziを使用し、オーディエンスが興味を持って見られるようなプレゼンテーションを目指しました。

⑤ 個人の感想

昨年のISC57には参加者として参加しましたが、今年はテーブルチーフとして運営に携わらせて頂き、昨年とはいろんな意味で違った経験をさせて頂いたと思います。議論のテーマ決め、議論プランの模索や参加者選考、本会議でのファシリテーションなど、初めてのことばかりで、本当に貴重な経験でした。本会議では、英語で議論を回すことの難しさ、全員が納得のいくように進めることの難しさを痛感しました。もっとスムーズに議論を行うことができたのではないかと反省しています。頼りないテーブルチーフでしたが、最後のサマリープレゼンテーションを終えることができたのも全て、参加者の皆さん、サポートスタッフ、また議論の流れの相談に乗っていただいた方々のおかげです。この場を借りて感謝申し上げます。

学生が国際問題を議論して何になるんだと、思う方もいるかもしれません。しかし、たとえ現実に見合わない、また実効性の薄い解決策にたどり着いたとしても、これからの社会を担う学生が、世界が背負う問題に興味を持ち、話し合い、知見を広めることに大きな意義があると思います。参加者の皆さん、または私たちのプレゼンテーションやこの報告書を読んでくださっている方々が、この議論から何か一つでも学ぶことがあったのなら、とても嬉しく思います。

テーブルV

おけるメディアと人々の在り方

～より豊かな情報化社会を目指して～

テーブルチーフ 大谷茉莉花

① 議題の背景/現状

ブログや SNS などの発達により誰もが容易に情報の発信者となり社会に影響を与えることができるようになりました。その最たるものとして 2011 年にチュニジアで起こったジャスミン革命は’Facebook 革命’と言われたりします。また日本国内でもインターネットを利用して人を集めた反原発デモなどが頻繁に行われました。このように政府や社会体制への意見をブログや SNS で発信し、人を集めることで具体的な行動をとりやすくなるという点で我々の生活を革新したと言えるでしょう。

しかしその反面、個人が情報発信する機会が増えることで著作権侵害の問題が起きたり、プライバシー侵害の問題が頻発しています。情報発信者としての個人は現在の状況を活かしきれてはいないと考えます。

またテレビ局のスポンサー偏重など発信する側の偏りも最近指摘されてきています。情報は私たちが考え判断する材料となりますが、それが偏っていることで私たちは選択の幅を狭められたり、よりよい判断を逃したりしてしまいます。本来、情報資源とくにマスメディアは市民により有益な情報を与え、集団をより良い方向を導くという役割を担っているはずですが現状ではそれが機能していません。情報の受け手となるとき私たちはその真偽や価値を自分たちで判断しなくてはならない状況ではありますが、多くの場合、情報を鵜呑みにしてしまい、メディアからの情報に踊らされているというのが現状となっています。その状況を打破するために情報の発信者をどう変えていくことが出来るか、また与えられた情報をより活用できるような受け手を育てるにはどうしたら良いか考える必要性があります。

これらの問題を踏まえ、時間の制約も大きいので、参加者の興味に合わせて幾つかの問題に焦点を絞って話をすすめていくこととなりました。具体的に焦点を当てたのは日本におけるマスメディアの記者クラブ問題とウェブサイトにおける犯罪の２点になります。

② 事前勉強内容

◆ プレISC

日本人参加者の初顔合わせだったため、まずはお互いの関心を知り打ち解けること、英語で話す練習をすることの２点を目的として進めました。

午前中は日本語と英語で自己紹介の練習、英語で話す練習を行いました。日本語での自己紹介の時には自分を示す漢字一文字を書いてもらい、２人一組になって互いにインタビューしあいました。自己をどのように見ているか、また他の人から観た自分はどうなのかを考えることが出来たと思います。そこで得られたネタを基に英語で自己紹介をする練習をしました。はじめのうちは苦戦していましたが、繰り返すうちに皆ある程度形になったかと思います。

午後にはメディアに関する新聞記事を２本読み、個々が関心のあるメディアを取り巻く問題について話し合いました。その中で第４の権力としてのマスメディアの役割やwebソースの信頼性の薄さ、受信者からの働きかけはどうあるべきかといった話題が話し合われました。

１日のプログラムを通じて上記２点の目的は達成されたと感じました。何よりテーブルメンバー同士が打ち解けることが出来たのがプレISCでの大きな収穫でした。

◆ 事前勉強会

事前勉強会は東京で２回行いました。本会議でどのトピックを扱うか選定しそれを深めること、英語でディスカッションする練習をすることの２点を目的に実施しました。

初回はマスメディアの権力との癒着を皮切りに話し始めました。そもそも癒着によるバイアスは悪いことなのかという問いかけに対し肯定派も否定派もおり、個人的にも面白く感じました。癒着によるメリット・デメリットを話している内に国に寄って状況は違うものだという意見も出ました。企業としてのマスコミが存在する限り日本における癒着はなくならないので、ではどうすればバイアスを減らせるか、ということで web を使ってマスメディアのモニターをするという切り口で議論をすすめることになりました。

また「大学生は一人暮らしすべきか、実家で暮らすべきか」をテーマに英語でディスカッションしました。

２回目の勉強会では働きかけによってマスメディアが変化するかどうかを具体的な事例を交えて話し合いました。この中でマスメディアの役割をより具体的に、どのような人物をどのように動かすかという観点で考えることができました。また日本のケースを問題意識として提示することにしたのでそれをまとめ、外国人参加者から上がりそうな問題意識を知るために各国の現状を調べる

ことを本会議までの課題としました。

③ 本会議内容

◆ 分科会 1 ［アイスブレイキング］

外国人参加者を交えて初めて顔を合わせる機会でした。自己紹介を行い、そのあとフリートークをしました。全体では人数が多いため、3 つのグループに分けてメンバーを変えながらフリートークで自己紹介を行いました。小グループに分けることでより話しやすい雰囲気が出来ていたのではないかと思います。その後、全員がお互いの顔と名前を一致させられるように名前当てゲームをしました。

◆ 分科会 2 ［問題提起］

日本人参加者で事前に話し合った問題について外国人参加者にプレゼンをしました。参加者は共通して情報を発信する際のバイアスを問題に感じていたので事前勉強会の時と同様にバイアスを減らすために web メディアをどう活用できるか、影響力をもった web メディアはどのようなものであるか話し合いました。中国における新幹線事故の報道のように、世界的に見ると web 発祥のムーブメントでマスコミの報道が覆った事例が多くあることをうけ、web の持つ影響力を全員が確認しあうことが出来ました。対策を考えるために、具体的なケースをみていこうということで国を絞って日本について話すことに決め分科会を終えました。

◆ 分科会 3 ［各国の状況の把握］

日本におけるバイアスの事例として記者クラブを取り上げました。記者クラブの構造を解説した上で、なぜバイアスが発生するのかという問題点を探りました。しかしこのバイアスのどこが問題なのかという意見が出て、そもそも日本は情報に比較的自由にありつけるのにそれをしない受け手に問題があるのではないかという指摘もありました。行動を起こさない限りは変化はもたらされないが、政治や報道の構造的に日本は国民が動くしか無い。しかしその国民も受け身で行動を起こせないという現状がありました。このことは日本の国民性をよく知っている日本人参加者にとっては問題に感じられたようですが、外国人参加者にとっては理解し難い状況だった様で議論が行き詰ってしまいました。

そこで日本だけでなく参加者各国の状況をより理解せずにはこの議論はなりたたないということになり、各国のメディアの状況について質疑応答をし、情報共有を行いました。ここで得た情報を基に世界に共通する問題を抽出していこうという方向が定まったところで分科会を終えました。

◆　分科会４　［問題点の列挙］

前回共有した状況を踏まえて各自がメディアにまつわる問題点を付箋に書き出し、グルーピングを行いました。こうして列挙していく中でも国によって如何に状況が違いすぎるかということを認識しました。しかし状況が違うからこそ、たくさんの切り口で問題を挙げることが出来ました。従来のマスメディアに関わるもの、web メディアに独特のもの、どちらにも共通の問題があったり、日本におけるデジタル・ディバイドやトルコの政府による統制などやはり国に独特なものもあったりしました。共通した問題点が把握できたところで分科会を終えました。

前日までは全体での話し合いが多く、発言の回数に偏りがちでしたが、個人作業で付箋を書いてもらいそれを解説してもらうという方法をとり、そのような偏りを解消することが出来ました。

◆　分科会５　［目標・理想の形の模索］

問題点を基にそもそも情報伝達メディアはどうあるべきかという理想とメディアの担うべき役割について小グループに分かれて話し合いました。前述の通り少人数の方が話し合いを進めやすく、それまでよりも発言数自体が増え活発に意見のやりとりが出来ました。現状と理想の乖離が最も激しいものの１つとして web メディアが自由であるが故に犯罪の温床となっていることが指摘され、それらをなくすためにどうすればよいかを焦点として話し合っていくことになりました。

◆　分科会６　［現状における問題点の把握］

インターネット上における犯罪については大きく２つに分類して話し合いました。１つ目は薬物取引や児童ポルノなどの違法サイトで２つ目は著作権侵害についてです。前者も後者も国によって規制の度合いが違うことが一番の課題でした。インターネットには国境はないので、ある国で違法だからといって他の国では法律に反していないサイトを閉鎖することは出来ません。国ごとで政府なり警察なり NGO なりが何らかの機関を設けそれらの犯罪サイトを自国からアクセスできないようにする必要があります。しかし膨大なサイトの中から犯

罪サイトを見つけ出すことはかなり難しいのでそれを克服するためにユーザー個々人が簡単にその機関に報告をすることが出来るようなシステムが必要であるという結論に至り、分科会を終えました。

◆　分科会７　［現在行われている対策と解決策の改善］

違法サイトについては一般のユーザーも積極的に報告するかもしれないが、著作権侵害コンテンツについては報告するインセンティブがないので、それらを如何に克服するかについてブレストしました。

現状で様々なサイトに使われているフラグを立てるというシステムを基に、それを使うインセンティブをどう与えるか考えました。クーポンなどを発行するという案もありましたが、あからさまな特典はチートを助長してしまいます。

結論として、呼びかけを行う以外に手のうちようがないと判断しました。ただしその呼びかけ・キャンペーンを行う主体も国や文化によって変えていくべきだろうと結論づけました。

◆　分科会８、９　［プレゼンテーションの準備］

サマリーでの発表に向けて議論した中でどの点を発表するか取捨選択をし、分担してパワーポイントを作成しました。

④　個人の感想

テーブルチーフとして ISC58 の運営に携わらせて頂く中でいろいろな貴重な経験をすることができました。困難なこともありましたが、最後まで投続けることが出来たのは周りのコミやテーブルメンバーが支えてくれたお陰です。

テーブルチーフとして自分が学んだことは２つあります。１つ目は異文化間交流の難しさです。言葉の壁はありますが、それ以上にバックグラウンドの違いが大きな障壁となりました。国や状況、或いは個人によって「当たり前」は違う。それを意識するのはなかなか難しく、言葉が悪いから伝わらないのだろうか、と初めのうちは英語力のなさに甘えていました。しかし話をしっかり聞く内に各国で状況が違うものなのかと実感するようになり、当たり前だと思っていたことは他の人にとっては想定外の状況であると気付かされました。それまでどうしてこの人はこんなことを言うのだろうかと上辺ばかりで、そこに至る背景を意識することが出来ず、場の空気がかなり悪くなってしまったかと思います。背景を意識することで、あまり意見を積極的に言わない参加者についても言わないなりの理由があるのだろうとそれに興味が湧くようになりました。

２つ目は妥結点の見極め方です。どのテーマについても共通して言えることではありますが、具体的かつ即効性のある解決策はなかなか見つかりません。

世界中で話し合われてきた問題を学生が高々一週間話し合ったところで解決出来るはずもないのです。重要なのは問題を見つめて意見を交わすことです。学生が会議を進めていく上で目指すべきポイントは何なのだろう、テーブルメンバーは何を打ち出したいのだろう、そういったことを常に意識してテーブルを進めていました。参加者のモチベーション維持のために各自の満足度を意識するといういい機会でした。

自己と他者の違いを意識し相手の求めるものを考えるというコミュニケーションの基本を改めて実感することが出来ました。

またメディアと人の関わりからも多くのことを学ぶことが出来ました。世界に情報統制の厳しい国が多数あるのは知識として知っていましたが、その国で暮らす人がそれをどのように捉え対処しているかなど生の声を聞けたことは大きかったです。他の国の状況を知ることで日本人が良くも悪くも慎重で集団至上主義であると感じるようになりました。日本では比較的自由に情報を手に入れられるのに、そもそも求めない人が多いように感じています。有効な情報をより多くの人に伝えることが出来れば社会の行動も変わるはずだと信じているので、その手助けを出来るような人間になりたいと決意を新たにしました。決意ということで自分にとっての ISC58 はここで終わりではありません。これからこの決意を実行に移せるように成長していきたいと考えています。この場はきっかけに過ぎないのです。自分だけではなく ISC58 に携わった人すべて、そして ISC に関心をもってこの文章を読んでくださった皆さまにとって ISC がよいきっかけになると嬉しいです。このようなきっかけを与えてくれた ISC に感謝します。本当にありがとうございました。

総務総括

総務部長　末岡美緒

第 58 回国際学生会議は「未来を据えて、この世界・この社会で今考えること」といった総合テーマのもとで 7 日間開催されました。昨年の第 57 回では東日本大震災の影響で関西での開催でしたが、本年は例年通り東京での開催となりました。

活動の中心となる分科会以外に、日本文化体験や各種パーティー、研修旅行、また今年は新しい試みとして各国文化紹介の代わりに各国のスイーツを持ち寄ってスイーツパーティーを行いました。7 日の間、分科会での議論だけでなく、様々なプログラムを行ったことによって、他のテーブルの参加者との交流だけでなく全体的にメリハリのあるプログラム構成になったのではないかと思います。成果発表を終えてからの参加者の笑顔や、フェアウェルパーティーで参加者が楽しんでいる姿を見てやっとこれまで自分達がしてきたことに意義があったのだと思うことができました。

さらに、各プログラムにおいてこれほど円滑に進行できたのは、各団体、協力していただいた皆様のお力があったからです。この場を借りてお礼申し上げます。

もちろん至らない点は多々あったと思いますが、この反省点を来年度に活かしさらに良い国際学生会議になるように努力してまいります。

最後になりましたが、第 58 回国際学生会議を無事に終えることができたのは企画段階から、本会議の間までご支援、ご協力いただいたすべての方々のおかげです。57 回続いてきたこの国際学生会議の 58 回目に総務部長として関わることが出来、参加者やご協力いただいた沢山の方々に出会えたことに感謝いたします。第 58 回国際学生会議に関わって下さった皆様に、心からお礼申し上げます。

以上を総務総括とさせていただきます。ありがとうございました。

各プログラム報告

開会式

開会式では参加者全員が初めて顔を合わせることとなりました。本会議開催を宣言する実行委員長の挨拶を通じて、皆が良い緊張感を持つことができました。司会は参加者からの代表者 2 人が務め、また参加者挨拶として、日本人・外国人参加者の代表者各 1 名より本会議に向けた熱い気持ちを述べていただきました。（写真左：国際教育振興会南原様にお話を頂いた様子）

基調講演

第 58 回の開会式では、後援をしてくださった経済人コー円卓会議日本委員会の事務局長である石田寛様に基調講演をしていただきました。お話の中では世界地図を使って世界を多様な視点から見ること、そしてそれを根底にある原因を見据えながら捉えるべきであるということなどをお話頂き、参加者にとってその後に控えるディスカッションや他国の参加者との交流に向けて鼓舞されるものとなりました。（写真は経済人コー円卓会議日本委員会の石田様にご講演頂いた様子）

海外文化紹介

ISC58 では文化紹介としてスイーツパーティーを行いました。今まではスライドショーを用いて自国の文化を紹介するだけものでしたが、さらに他国の文化を身近に感じてもらえるよう、体験型の文化紹介にしました。ただ持ってきたお菓子を食べるのではなく、ビンゴゲームを織り交ぜたものにし、参加者同士のコミュニケーションもとれるように工夫しました。

日本文化体験

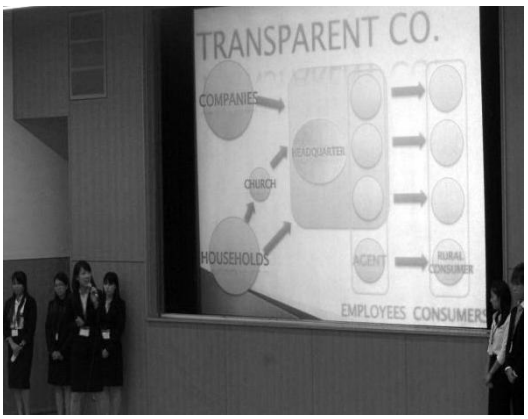
本会議 5 日目に行われた日本文化体験では、NPO 日本文化体験交流塾様にお世話になり、茶道体験と華道体験をさせていただきました。外国人参加者はもちろん、日本人参加者も普段では触れることのない日本の伝統文化に新鮮さを感じながら、互いに交流を深めることができました。お互いの文化に触れ、その国を知ろうとすることが相互理解への大きな一歩となることを願っています。

東京研修旅行

本会議中の８月２９日に実施しました。品川アクアスタジアムを出発し、午後からは事前に参加者の希望をとった５コース（政治、美術、自然、サブカルチャー、歴史）に分かれ東京の名所を回りました。政治のコースでは国会見学を行い、訪問に際して山井和則衆議院議員にご協力いただきました。最後には全コース浅草で集合しました。多くの参加者から楽しかった、良い息抜きになったという声を頂きました。

成果発表会

国際学生会議ではディスカッションの成果を最後に一般に公開してプレゼンテーションを行い、サマリー発表会としています。最後に発表をするという事実は参加者にとって議論の目標ともなり、ディスカッションの内容のレベルを保つ役割も担っていると考えています。本年度第 58 回では、各テーブルにプレゼンテーションの時間及び質疑応答の時間が与えられ、英語内容共にレベルの高いプレゼンテーションになったと考えております。質疑応答では、会場に集った大学生を中心とする多くのオーディエンスから手が挙がり、活発な意見交換が行われました。また、助成を頂いている国際教育振興会賛助会から、開会式にもお越しいただいた南原晃様にご出席賜りました。



ウェルカム・フェアウェルパーティー

ウェルカムパーティーでは、参加者同士の仲を深め、本会議での議論を活性化させるための交流会を目的としていました。最初は互いに緊張があったものの、食事を共にすることで徐々に打ち解け合い、音楽に合わせてダンスをするなど大いに盛り上がりました。

本会議最後のプログラムとなったフェアウェルパーティーでは、1 週間を共に過ごした仲間との別れを惜しむ声が多く聞こえました。本会議で深まった絆を感じると同時に、この繋がりを今後とも大切にしていきたいと思う時間となりました。

閉会式

閉会式でも日本人参加者の 2 人に司会を務めていただきました。本会議を通じて感じた国際交流・相互理解の意義や互いに仲間を思う気持ちを皆が考え直す時間でもありました。最後に日本人・外国人参加者の代表者各 1 名より挨拶をいただき、その後集合写真を撮り、閉会式は終了となりました。全員の心から 1 週間の思いが溢れてくるのを感じさせるものとなりました。

第 5 章

参加者の感想

ISC58 の感想

ISC58 の感想

熱く・弾ける夏、第58回国際学生会議

関西学院大学4年 矢野真衣

雇用、次世代エネルギー、貧困、移民、情報化社会。これらの問題は国際化社会も伴って私たちが避けては通れない課題となっているのではないでしょうか。学生である私達が本当に有効な解決策を見いだせたかどうかは分かりません。しかし、その解決策を模索する過程で様々なことに向き合いましたので、世界が少し広がった様に思います。英語を公用語とするプログラムでしたので、当然ですが英語力が向上しました。しかし単にそれだけではなく、新たな“価値観”・“発見”・“友情”を得られたことこそが、このプログラムを通して得た一番の財産です。今回の国際学生会議でこの財産を得るまでに、私は大きく分けて三つのことに向き合いました。

第一の「向き合い」は、今世界で起こっている問題に対してです。私は貧困トピックのテーブルに属していました。当初は漠然としていてどこから手を付けていいのか分からない状況でした。できるだけ問題を具体的に考えられるよう地域を限定し、そこにおける貧困問題について真剣に向き合いました。二度の事前学習会や自主学習・課題を行い、問題解決のヒントを得ようと必死に取り組みました。いざ本会議になり、ディスカッションを進めていくと異なる“価値観”をぶつけ合いました。英語でうまく自分の考えが伝えられずに苦戦したこともありました。それでも決して妥協せず、分かるまで話す。自分たちが納得するまで議論したことが本当に印象的でした。

第二の「向き合い」は、日本の生活・文化・習慣についてです。一週間、同じ屋根の下で国際色豊かな仲間たちとの生活を通して、普段私たちが何気なく使用しているトイレや、大浴場、そんな些細な生活の一部にも国を超えれば生活様式に違いがあることに気付かされました。文化体験や東京スタディーツアーを通して、私たちの伝統的な文化でありながらもあまり知らなかったお茶やお花の作法、江戸時代の歴史、東京ならではの文化、まだまだ勉強不足だと痛感しました。自分の国について改めて知り、他国の生活・文化・習慣について“発見”できたのも、このプログラムならではだと感じました。

第三の「向き合い」は、海外の学生・日本人参加者・実行委員、多くの人に対してです。様々な側面を共有していくにつれて、一人一人に対する愛着が増していきました。一日中会議室にこもってディスカッションをし、時には一緒にお酒を酌み交わし、食事に出かけ、入浴をする等、一週間とはいえ密度の濃い時間を過ごせたからこそ強い“友情”を結ぶことが出来ました。

この三つの「向き合い」から、私は多様な“価値観”・多くの“発見”・強い“友情”を得ることが出来ました。

この様な素晴らしいプログラムを実施してくれた実行委員の皆に本当に感謝しています。そして最後になりましたが、今回ご支援・ご協力を頂きました多くの企業・団体の皆様に厚く御礼申し上げます。

筑波大学1年　田口梓

世界は狭い。
これが私の感想です。

私は大学では医学を学び医師を目指しています。しかし今回Tableとして選ばせて頂いたのは、学問としては関連が無いマスメディアについてでした。実はテーマ選択時はいわゆる国際的問題については憧れのみで知識がなく、国際と言うよりは日本に一番関係のありそうなテーマとして選んでいました。それでも医学からすれば全くの異分野、自分の中のテリトリーを広げた気でいました。しかしこれもまた入り口でしかなかったと気づかされました。 会議前メンバーでは議論の入り口をどこにするかを事前に考えました。英語を話す経験はほとんどなく参加させて頂いた私ですが、自分にとっては世界への入り口がこのISC58となりました。

初日からバックグラウンドつまりは前提を異にする人たちとのディスカッションの難しさという壁にぶつかりました。世界には様々な国があり状況も常識も異なる。そんなあたり前のことをあたり前に実感しました。あくまで遠くの人。しかしそのままでは終わりませんでした。まず日本がそして世界が身近に感じられて来たのです。

世界に触れると今度は自分の国がいつにもまして意識されるようになりました。何かを考える際には比較する何かをもたねばなりません。そうすると世界の国々を考える際にはどうしても日本が必要になってきました。と言うよりは日本のないに世界を考えることはできなかったのです。しかし寝食を共にし、細かな差異を感じるにつれ、いまの日本の文化、精神と言うのは昔から受け継がれて来た部分もあると実感し、茶道や華道体験についても日本人として再発見がありました。ディスカッションだけではできない発見でした。
こうして日本はしっかりした説得力を持って自分の中で確認できました。

では日本から広がって世界についてはどうか。今会議の参加者出身国は イスラエル、トルコ、ドイツ、フィリピン、韓国とあり様々に集まったと最初は感じました。ですが一週間を過ごしてどうだったでしょうか。ISC参加前を思うと、現在おきているトルコとシリアの武力衝突を気にかけるはずはありませんでした。多くの人は石油を巡ってこの事態を考えているのでしょう。しかし今、私はトルコに住む同じテーブル参加者のことを考えます。国としてではなく人のつながりで世界をみるようになりました。すると世界がなんと狭く感じられるのでしょうか。逆に人を知らないだけで、隣国の国々ですらなんと遠く感じるのでしょうか。こうして世界もしっかりとした具体的な形をもって自分の中で確認できました。

ISC58 という入り口から入り、メンバー達がもつエンジンのようなパワーによって、私は現在チャリティオーケストラの運営や日本国際保健医療学会学生部会への参加を始めています。ともに成長する機会を用意して下さった ISC58 メンバー、議論や様々なプログラムをオーガナイズして下さった実行委員、特にテーブルチーフに感謝します。
今後もこのISCの成功と発展を期待しています。

Nayoon Kim (South Korea)

My name is Nayoon Kim from Korea. It was my first time enjoying ISC and the impressions and memories from that time still lingers in my mind although it is over already.

I think it is my best choice that I had made in this summer to participate this program. It was so useful and helpful to me to talk and discuss about global issues with friends from all over the world. But it is more meaningful that I made a lot of not just friends, but really really nice best friends. I'm so glad to have you guys as my new friends. I really want to participate and meet ISC friends again.

During the study tour, it was too hot to tour, but Japanese friends didn't make their face tired. They didn't say they are tired and always smile. That makes me feel nice, comfortable, and make energy.

And also thank you for my host Mana. She made me breakfast everyday and she lend her bed to me every night. Even though it was just 3 or 4 days, I really miss her now and I feel like we are an old friend. Also thank you for other friends. They must be tired and exhausted after finishing the study tour, but every night they had a meal with me and always smile at me and also buy me some meal. I feel that they are really nice people and that help me adapt to Japan fast.

And the Tokyo ISC program was also awesome. First few days, we don't know what we can do to solve the problems about immigrant. But we are keep talking and study at night and then made our own solutions. I was so nervous when presentate our presentation and made mistakes. But looking back on it now, all of those things are all nice memories ever.

Again, thank you so much to all of my friends that I met at Japan. Thank you for having me in that program. Thank you for giving me nice smile. Thank you for giving me really nice memories ever. Nowadays, I came back to Korea and live a hectic and busy life because of school work things. But those memories from Japan in this summer help me and cheer me up so much when I feel hard and stressful. I really want to meet you guys again next year. A ri ga to!!

Friends are Special, Treasure Them-Unknown

Kenny Ronkainen (Finland)

International Student Conference 58th, my second time joining the ISC. But one must understand that nothing you do during the International Student Conference is anywhere near as important, or as powerful, as the friends you will find there.

Already at the Study Tour you will bond with people, while making handkerchiefs with traditional Japanese silk pressing techniques, singing in the karaoke, or just pretending to your fingers form a monocle in the middle of Kyoto shopping areas. Many of the ST's like Kyoto and Kobe, offer insight to the traditions of Japanese culture. While others like Kyushu and Osaka, will satisfy the hunger of travellers and shoppers!

In the conference itself, you have the unique chance of experiencing how the Japanese group work differs from the western style. But you will also hear about the contemporary matters from a completely new perspective. I have been repeatedly surprised how things that I have taken as granted can be completely different in Japan, and even in other European countries. These perspectives, the bonds and internationality will bring resolutions you would not expect. It doesn't matter if you are dreaming of being an exchange student, or just plan on travelling around Japan, with International Students Association you will have friends all over Japan.

第58回国際学生会議　事業報告書

発行責任者：岩佐　数音
編集責任者：伊藤　優衣

発行：日本国際学生協会　第58回国際学生会議実行委員会
〒662-8501　兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155

関西学院大学文化総部I.S.A.